# 2017　こです　HOKKAIDO

Collected papers
Domestic Science
Studies

北海道高等学校長協会家庭部会

# ２０１７こです「ＨＯＫＫＡＩＤＯ」
## 【平成２８年度版】（案）
## 目　　次


○ 巻 頭 挨 拶
北海道高等学校長協会家庭部会長　北海道江別高等学校長　小 松 芳 幸　1

○ 挨 拶
北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班　主査　佐 紺 摂 子 様　2

Ⅰ　平成２８年度北海道高等学校長協会家庭部会活動報告
◆家庭部会の組織・事業内容等
北海道高等学校長協会家庭部会長　北海道江別高等学校長　小 松 芳 幸　3

◆（財）全国高等学校家庭科教育振興会及び同北海道地区校長会報告
北海道高等学校長協会家庭部会長　北海道江別高等学校長　小 松 芳 幸　5

◆全国福祉高等学校長会第２２回総会・研究協議会参加報告
全国福祉高等学校長会理事　北海道置戸高等学校長　花 田 祐 治　7

◆北海道高等学校家庭科教育研究協議会企画委員会報告
1　第６５回北海道高等学校家庭科教育研究協議会を終えて
北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長
北海道三笠高等学校長　佐々木 淑 子　8
2　オリエンテーション
北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長
北海道三笠高等学校長　佐々木 淑 子　１０
3　研究発表
□提言１　テーマ　アクティブラーニングにおける指導と評価の工夫・改善
～ルーブリックによる評価とグループ学習を取り入れた授業実践～
北海道釧路湖陵高等学校教諭　相 坂 静 香　１２

□提言２　テーマ　生徒の主体性を育む、ＳＳＨにおける
「基礎課題研究」の実践について
北海道室蘭栄高等学校教諭　坂 本 洋 子　１３

□提言３　テーマ　生徒自身が作成する試験問題の活用による意欲、関心の育成について
～消費生活に関する副読本の利用から～
北海道野幌高等学校教諭　池 田 麻 子　１４

4　分科会報告
□第１分科会報告　函館白百合学園中学高等学校教諭　福 田 桃 子　１５
□第２分科会報告　北海道札幌啓北商業高等学校教諭　野 村 良 子　１６
□第３分科会報告　北海道羽幌高等学校教諭　笠 島 絵里奈　１７

5　講 評
北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班　主査　佐 紺 摂 子 様　１８

6　グループ別体験研修講座報告
□A　衣生活　北海道札幌厚別高等学校教諭　筧　理子　19
□B　食育セミナー　北海道札幌手稲高等学校教諭　東　昌江　20
□C　住生活セミナー　北海道真狩高等学校教諭　前田義江　21
□D　生涯設計セミナー　函館白百合学園中学高等学校教諭　福田桃子　22

◆北海道高等学校長協会家庭部会調査研究委員会報告
調査研究委員長　北海道津別高等学校長　井上明子　23

Ⅱ　平成２８年度北海道高等学校家庭クラブ連盟活動報告
1　北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動について
北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長
北海道札幌北高等学校長　大鐘秀峰　25

2　第５７回全国高等学校家庭クラブ連盟指導者養成講座に参加して
北海道当別高等学校教諭　村田ひろ美　26

3　第６４回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会北海道代表出場校として
□ホームプロジェクトの部　北海道札幌北高等学校教頭　髙橋一矢　27
□学校クラブ活動の部　北海道札幌丘珠高等学校教諭　黒田さとみ　28

4　第６５回北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会を終えて
北海道札幌南高等学校教諭　溝淵和江　29

Ⅲ　平成２８年度北海道家庭科技術検定委員会活動報告
1　家庭科技術検定の実施について
北海道高等学校家庭科技術検定委員会委員長
北海道名寄産業高等学校長　増田雅彦　31

2　全国高等学校家庭科技術検定全国専門委員会に参加して
□全国専門委員（食物）　北海道名寄産業高等学校教諭　荒木恵理　32
□全国本部委員（保育）　北海道当別高等学校教諭　今多靖子　33

Ⅳ　家庭科教育に関する報告
1　第５４回北海道高等学校教育研究大会教科別集会家庭部会を終えて
事務局　北海道札幌新川高等学校教諭　柿澤小百合　35

2　第４回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会を開催して
事務局　北海道江別高等学校教諭　上野博美　36

3　意見・発表大会に参加して
□最優秀　発表者　北海道千歳北陽高等学校２年　鈴木颯太　37
指導者　北海道千歳北陽高等学校教諭　古御堂敦子

4　平成２８年度　北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して
□発表校《家庭部会》　発表者　北海道当別高等学校３年　横田ゆう　３８
指導者　北海道当別高等学校教諭　村田ひろ美
□発表校《福祉部会》　発表者　北海道置戸高等学校２年　一ノ戸真由　３９
指導者　北海道置戸高等学校教諭　大内亜瑞沙

5　平成２８年度初任段階教員研修（１年次（初任者）研修・後期）に参加して
北海道利尻高等学校教諭　成田佳織　４０

6　１０年経験者研修〔教科指導等研修Ⅰ・Ⅱ〕に参加して
北海道夕張高等学校教諭　中尾綾　４１

7　平成２８年度産業・情報技術等指導者養成研修に参加して
北海道江別高等学校教諭　上野博美　４２

Ⅴ　福祉教育等に関する報告
1　平成２８年度第１６回福祉に関する教科・科目設置校研究協議会を終えて
北海道置戸高等学校長　花田祐治　４３

2　第１回北海道高校生介護技術コンテストの開催について
北海道置戸高等学校教諭　福祉科長　水谷愛　４４

3　第５回全国高校生介護技術コンテスト石川大会に参加して
北海道代表　北海道置戸高等学校３年　山田亜希　４５
〃　３年　吉田桃花
北海道置戸高等学校教諭　相馬良美

Ⅵ　各地区（ブロック）家庭科研究会の一年間の活動状況　４７
1　石狩管内　2　渡島・檜山地区　3　後志管内
4　空知管内　5　上川・名寄地区　6　留萌管内
7　宗谷管内　8　オホーツク管内　9　根釧地区
10　十勝管内　11　胆振管内　12　日高管内

Ⅶ　特別寄稿
◆　「たくましく生きる力を育む　家庭科教育の発展を期待して」
北海道江別高等学校長　小松芳幸　５３
◆　「多くの先生方との出会いに恵まれた３８年間」
北海道札幌南高等学校教諭　溝淵和江　５４

○　編集後記　北海道三笠高等学校長　佐々木淑子　５５

# 巻　頭　挨　拶

北海道高等学校長協会家庭部会長
（北海道江別高等学校長）小　松　芳　幸

日頃より、校長協会家庭部会の運営にご支援ご協力をいただき、心よりお礼申し上げます。平成２８年度は全道１８５校の加盟をいただき、予定した諸事業の全てを無事に終了することができました。これもひとえに道教委、各高等学校、関係各位のご協力の賜と感謝する次第です。有り難うございました。

さて、次期学習指導要領の改訂に向けて、審議のまとめが出されるなど、その方向性が明らかになってきました。家庭科においては必履修科目が現行の三科目から「家庭総合」と「家庭基礎」の二科目に集約されそうです。何のことはない元の状態に戻るということです。しかし、これまでの学習指導要領が「何を学ぶか」に限定されていたのに対して、「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」にまで言及されている点は、これまでとは大きく異なる点です。そして、「どのように学ぶか」で注目を集めているキーワードが、いわゆる「アクティブ・ラーニング」（ＡＬ）です。

中教審のまとめ案では、「次期改訂が学習・指導方法について目指すのは、特定の型を普及させることではなく、学び全体を改善し、子供の学びへの積極的関与と深い理解を促すような指導や学習環境を設定することであり、教員が子供たちの発達の段階や発達の特性、子どもの学習スタイルの多様性や教育的ニーズと教科の学習内容、単元構成、学習場面等に応じた方法について研究を重ね、ふさわしい方法を選択しながら、工夫して実践できるようにする」となっています。そして、ＡＬのポイントとして、①課題の発見・解決を念頭に置いた深い学びが実現できているか　②他者と協働して対話的な学びがなされているか　③子供たち自身の主体的な学びとなっているか　を挙げています。

ＡＬが出た当初は、あたかも講義形式の授業が悪で、ＡＬという画期的な授業形式があるようにも捉えられていました。しかし、実はそうではなく、子供の深い学びを引き出し、対話的な学び、主体的な学びとなるように、発問や授業の設定について、教員のより一層の創意工夫が求められているのです。

今年度も、家庭科を学ぶ北海道の生徒の活躍が随所に見られました。三笠高校が食物・調理の各種コンテストで全国優勝や上位入賞を果たしたのを始め、置戸高校の介護技術コンテスト全国準優勝、家庭クラブ全国研究発表大会において、札幌北高校と丘珠高校がホームプロジェクト・学校家庭クラブ活動の部門でそれぞれ全国準優勝を果たすなど、目覚ましいものがありました。これも、日頃から熱心に指導されている家庭科の先生方の、生徒に対する愛情溢れる指導の賜と敬意を表するところです。

家庭クラブ研究発表大会や意見体験発表大会における生徒の活躍、全道家庭科研究大会、福祉科科目設置校研究協議会、高教研家庭部会などにおける先生方の熱心に研修する姿を目の当たりにして、校長協会家庭部会の責任の重さを改めて強く感じたところです。

次年度以降も家庭部会に対する皆様のご支援ご協力をよろしくお願い申し上げ、巻頭のご挨拶とします。

# 次期学習指導要領とこれからの家庭科教育
## ～希望の火を灯して～

北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班　　主査　佐　紺　摂　子

平成28年12月21日に中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」が取りまとめられました。

本答申では、学校を変化する社会の中に位置付け、学校教育の中核となる教育課程について、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていくという「社会に開かれた教育課程」を目指すべき理念として位置付けています。

特に高等学校においては、18歳に選挙権年齢が引き下げられたということも踏まえて、これまで以上に高校生が社会に出る18歳の時点で求められる力をしっかりと整理していく必要があります。

生徒が、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができるようにするためには、「どのように学ぶか」という学びの質を重視し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業改善を図っていくことがとても重要です。

家庭科においては、「主体的な学び」とは、現在及び生涯を見通した生活の課題について、解決の見通しを持ち、課題の発見や解決に取り組むとともに、学習の過程を振り返って、次の学習に主体的に取り組む態度を育む学びです。

「対話的な学び」とは、他者との会話を通して考えを明確にしたり、他者と意見を共有して互いの考えを深めたり、他者と協働したりするなど、自らの考えを広げ深める学びです。

「深い学び」とは、生徒が生活の中から問題を見いだして課題を設定し、その解決策の検討、計画、実践、評価、改善といった一連の学習活動の中で、課題の解決に向けて自分の考えを構想したり、表現したりして、資質・能力を獲得する学びです。

最近、人間にしかできないとされてきた活動を人工知能が上回る状況が相次いで報道され、「人工知能は将来、私たちの仕事を奪うのではないか」とも言われています。しかし、まだまだ人間にしかできない部分、例えば、感性を働かせながら、自ら目的に応じて創造的に問題解決をしていくことができるような能力を育む教育を行っていくことがこれからの教育に求められるものであり、これは、正に、長年学校教育において思考してきた部分です。

「主体的・対話的で深い学び」の実践を通して、生徒が希望の持てる未来を切り拓く力を身に付けられるよう、私たち家庭科教員は希望の火を灯していきたいものです。

先生方におかれましては、これまでも家庭科教育の充実に御尽力いただいていることに深く感謝申し上げますとともに、今後とも、御協力をお願いいたします。

最後に、部会長である江別高等学校の小松芳幸校長先生をはじめ関係各位に、深く御礼を申し上げ、御挨拶といたします。

# Ⅰ　平成２８年度北海道高等学校長協会
# 家庭部会活動報告

# 北海道高等学校長協会家庭部会の組織と今年度の事業内容について

北海道高等学校長協会家庭部会長　　小　松　芳　幸
（北海道江別高等学校長）

今年度、北海道高等学校長協会家庭部会には、昨年より若干減少しましたが１８６校の加盟をいただきました。加盟並びに各種のご支援ご協力をいただいたことに厚く感謝申し上げます。

今年度の本家庭部会の組織、事業内容等は次の通りとなっています。

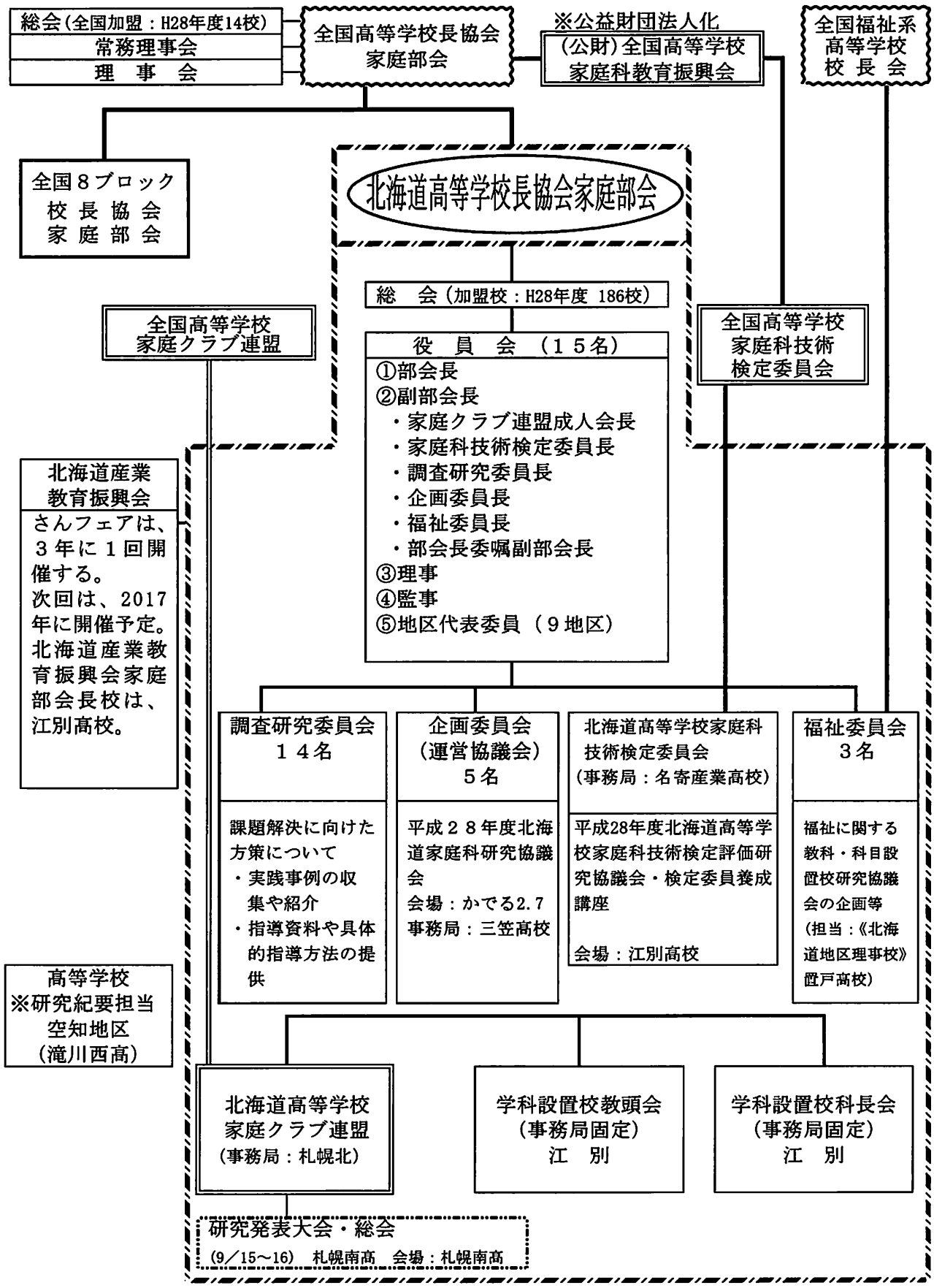
■平成28年度　部会の役員構成等

| 役　職 | 校長名・学校名 | 兼務する役職等 |
|---|---|---|
| 部会長 | 小松　芳幸<br>江　別 | 全国部会道代表理事<br>全国部会常務理事<br>全国家庭振興会理事 |
| 副部会長 | 増田　雅彦<br>名寄産業 | 全国部会常務理事<br>全国家庭振興会評議員<br>全国技術検定道理事<br>道地区委員 |
| | 大鐘　秀峰<br>札幌北 | 全国理事<br>道家庭クラブ成人会長 |
| | 花田　祐治<br>置　戸 | 全国福祉部会道理事<br>全国理事 |
| | 田村　俊行<br>当　別 | 全国理事 |
| | 佐々木 淑子<br>三　笠 | 全国理事、道地区委員<br>企画委員長 |
| | 井上　明子<br>津　別 | 全国理事、道地区委員<br>調査研究委員長 |
| 監　事 | 小路修司,千北陽<br>谷坂常年,野　幌 | 道地区委員 |
| 理　事 | 池田延巳,函大妻<br>鈴木譲二,江　陵 | 道地区委員 |
| 他の道地区委員 | 武田　久,倶知安<br>清澤智克,苫　東<br>小池博志,更別農<br>山本明敏,釧明輝 | 後志<br>日胆<br>十勝<br>釧根 |

■平成28年度　部会の主な事業

| 月日 | 事　業　（会　場） |
|---|---|
| 4/21 | 家庭科技術検定常任理事会（江別高） |
| 4/22 | 第1回家庭部会役員研究協議会（かでる2.7） |
| 4/28 | 全国家庭科教育振興会理事会（全国事務局） |
| 5/11 | 平成28年度家庭部会総会（ﾗｲﾌｫｰﾄ） |
| 5/12 | 道家庭クラブ連盟第1回研究協議会（かでる2.7） |
| 5/23 | 全国福祉校長会第1回理事会（東京） |
| 〃 | 全国家庭部会、常務理事会、理事会（東京） |
| 5/24 | 全国家庭部会総会、研究協議会　（〃） |
| 7/21,22 | 全国家庭クラブ連盟指導者養成講座（〃） |
| 8/1,2 | 全国家庭科実践研究大会兵庫大会（兵庫） |
| 8/2,3 | 道家庭科教育研究協議会（かでる2,7） |
| 〃 | 全国家庭部会北海道地区校長会（〃） |
| 8/4,5 | 全国家庭クラブ連盟研究発表大会（福島） |
| 8/9 | 道家庭科技術検定評価研究協議会・検定委員養成講座（江別高） |
| 8/23 | 第4回家庭部会意見体験発表大会（江別高） |
| 〃 | 第1回北海道高校生介護技術コンテスト（北翔大） |
| 9/15,16 | 全道家庭クラブ研究大会、総会（札南高） |
| 10/13,14 | 全国家庭部会秋季研究協議会（青森） |
| 10/18 | 全道産業教育意見体験発表大会（岩農高） |
| 11/5,6 | 第26回全国産業教育フェア～石川大会（石川） |
| 11/18 | 福祉に関する科目設置校研究協議会（置戸） |
| 1/12 | 高教研家庭部会（ｴﾙﾌﾟﾗｻﾞ） |
| 2/3 | 全国常務理事会、理事会（東京） |
| 2/4 | 全国家庭クラブブロック代表会議（〃） |
| 2/17 | 道家庭クラブ連盟第2回研究協議会（札北高） |
| 〃 | 第2回家庭部会役員研究協議会（ﾗｲﾌｫｰﾄ） |

# 【平成２８年度 北海道高等学校長協会家庭部会 組織図】




※　線 ▬/▬/▬ で囲まれた部分は家庭部会の組織や事業等を示す。

# （財）全国高等学校家庭科教育振興会　全国高等学校長協会 家庭部会　同北海道地区校長会　　報告

北海道高等学校長協会家庭部会長
（北海道江別高等学校長）小　松　芳　幸

Ⅰ　財団法人　全国高等学校家庭科教育振興会

○理事会

平成２８年５月２３日（月）13:00～14:00
ホテルメトロポリタンエドモンド

出席者　財団理事　小松　芳幸（江別）
評 議 員　増田　雅彦（名寄産業）

１　報　告

○平成２７年度家庭科技術検定受検状況

| | |
|---|---|
| ①被服製作 | ５０，９９４人 |
| ②食物調理 | １０４，３７３人 |
| 計 | １５５，３６７人 |
| 前年比 | －５，２７０人 |
| ③保　　育 | １１６，１０８人 |
| 前年比 | ＋３，４８３人 |

２　議　事

（１）平成２７年度事業報告
主な事業～家庭科技術検定の実施、
家庭科実践研究会（三重大会）

（２）平成２７年度収支決算書

▽経常収益　186,313,723 円
主な収入～検定事業　157,266,100 円
出版事業　22,189,580 円
▽経常費用　181,432,861 円

（３）平成２８年度事業計画
主な事業～家庭科技術検定の実施

（４）財団正味財産（平成 28 年 3 月 31 日）
326,868,655 円

（５）理事、評議員の選出
理事長　橋川　睦子（栃木宇都宮中央女子）
北海道代表理事　小松　芳幸（江別）
評議員　増田　雅彦（名寄産業）

Ⅱ　全国高等学校長協会家庭部会

○常務理事会

平成２８年５月２３日（月）14:10～14:40
ホテルメトロポリタンエドモンド

出席者　全国常務理事　小松　芳幸（江別）

１　報　告

（１）第116回秋季研究協議会（青森大会）
（２）第60回家庭科実践研究会（兵庫大会）
（３）第26回全国産業教育フェア（石川大会）

２　協議事項

（１）全国理事会・研究協議会の運営
（２）総会・研究協議会の運営
（３）家庭部会規約の一部改正について
（４）調査研究委員会委員について

○理事会

平成２８年５月２３日（月）14:50～17:20
ホテルメトロポリタンエドモンド

出席者　全国常務理事　小松　芳幸（江別）
増田　雅彦（名産）

１　報告・連絡事項

（１）家庭部会常務理事会報告
（２）公益財団法人理事会・評議員会報告

２　協議事項

（１）平成２７年度家庭部会事業報告

（２）平成２７年度会計決算報告

▽総収入額　14,130,109 円

主な収入～会費　11,298,000 円

6,000×1,883校（北海道 24 校,昨年比+5）

（３）平成２８年度家庭部会役員・財団役員

【家庭部会・財団理事長】

橘川睦子（栃木県立宇都宮中央女子高校長）

【北海道地区常務理事】

小松　芳幸（江別）　増田　雅彦（名産）

（４）平成２８年度家庭部会事業計画

（５）平成２８年度家庭部会会計予算

▽総収入額　14,865,280 円

主な収入～会費　11,220,000 円

6,000×1,870校（北海道 14 校,昨年比-10）

主な支出～事業費　8,200,000 円

研究協議会負担金　1,200,000 円

地区別校長会　900,000 円

○総会・研究協議会

平成２８年５月２４日（火）10:00～16:20

ホテルメトロポリタンエドモンド

出席者　全国常務理事　小松　芳幸（江別）

増田　雅彦（名産）

1　開会式

（１）理事長挨拶　橘川　睦子

（２）来賓祝辞

文科省初中局主任視学官　梶山　正司 様

産振中央会専務理事　富岡　逸郎 様

（３）退任校長表彰　挨拶

2　講　演

「社会人基礎力を高める地域企業・団体との協働法」

久米繊維工業（株）取締役会長　久米　信行 氏

3　研究協議

（１）「家庭に関する学科と大学・短大、企業との接続に関する調査研究」

埼玉県立不動岡高校長　武正　章

（２）「家庭科教員を活用した魅力ある学校経営」

茨城県立太田第二高校長　柴田　京子

（３）「技術検定の社会的評価を高めるために」

山形県立天童高校長　鈴木　慈

（４）「家庭学科等卒業者の進路状況調査」

千葉県立佐倉東高校長　安西　啓雄

4　講　話

文科省初中局教科調査官　市毛　祐子氏

Ⅲ　全国校長会家庭部会北海道地区校長会

1　日　時　平成２８年８月２日（火）

１３：３０～１５：５０

2　会　場　道民活動センターかでる 2.7

3　次　第

進行：三笠高等学校長　佐々木淑子

（１）部会長挨拶

北海道校長協会家庭部会長

北海道江別高等学校長　小松　芳幸

（２）来賓挨拶・説明

全国校長協会家庭部会副理事長

埼玉県立不動岡高等学校長　武正　章　様

（３）報　告

○平成２８年度全国高等学校長協会　総会・研究協議会（春季大会）等について

北海道校長協会家庭部会長

北海道江別高等学校長　小松　芳幸

（４）協　議

○平成２８年度北海道高等学校長協会家庭部会の今後の活動等について

（５）家庭部会校長参加者数　１５名

（６）運営者

北海道三笠高校　教頭　太田　和浩

# 平成２８年度全国福祉高等学校長会
# 第２２回総会・研究協議会　参加報告

全国福祉高等学校長会理事
（北海道置戸高等学校長）　花田祐治

**第２・３・４回理事会報告**

例年であれば、総会前の理事会が２回目であり、年度最終理事会であるが、今年度は臨時に２・４回の理事会が開催されたため、合わせて報告する。

○全国福祉高等学校長会 組織の改変と改変後の活動の在り方及びそれに伴う規約の改正

○次年度の生徒体験発表について
今年度並みのスケジュールを予定

○平成２９年度青森大会について
平成２９年８月９日～１０日
理事会・学科主任等代表者会議は８日に行う
分野別情報交換会をプログラム内に設定
教職員表彰規定を設け、功績が顕著な教職員を表彰

○社会福祉・介護検定について
今年度の大きな変更点
①２級の実施-１級は30年度から実施②受験要件の変更-４級・３級・２級の受験要件撤廃。何級からでもスタート可能に（複数受験が可能）③申し込み-口座振込の後メールで申し込み、振込手数料を引かずに振込んだ場合は返金されない④４級の難易度-難易度に変更は無いが、出題は教科書の本文からに限定（昨年注釈から出題し混乱）

○介護福祉士養成課程を設置する福祉系高等学校に関する調査研究について

○「福祉科」履修高校生の介護福祉士取得支援就学金支給制度（企画案）について

**総会・研究協議会**

○主任視学官挨拶：学習指導要領改訂の動向について等

○感謝状贈呈
北嶋淑子：前秋田県立六郷高等学校長
渡辺美智子：岐阜県立大垣桜高等学校長 以上2名

○基調講演（厚労省　社会・援護局　福祉基盤課福祉人材確保対策室 室長補佐　川部勝一　様）
介護人材（約25万人）確保のため、対策を総合的・計画的に推進。①潜在介護人材の呼び戻し②新規参入促進（学生・中高年齢者）③離職防止・定着促進、生産性向上等を総合的・計画的実施。

○生徒体験発表：最優秀「文部科学大臣賞」
栃木県立真岡北陵高等学校　松田　ユーゼル

**研究協議会Ａ**

**《授業研究》富山県立南砺福野高等学校**
『見える化・言える化・聞ける化を意識した授業づくり』
～「学習記録シート」の活用を通して～

**《現場実習》岐阜県立坂下高等学校**
『介護の魅力を感じる介護実習を目指して』

**《資格取得》徳島県立小松島西高等学校**
『主体的に学ぶ生徒の育成を目指して』
～学び合いから資格取得へ～

**《進路指導》倉敷市立倉敷翔南高等学校**
『生活福祉系列における進路指導の取組』

**校長総会**

○理事会の内容を報告・審議・・・承認
青森大会の原案が提示されたが、内容に意見があり４回目の理事会で修正されたものを承認。

**研究協議会Ｂ**（校長総会の裏で学校種別会議）
**分野別学習会**（人間関係力分野・障害者福祉分野）

**研究協議会Ｃ**

○検定・コンテストについて研修部より説明。

**介護分野学習会**
演題：「学校では教えてくれない福祉現場のこと」
講師：青山幸広氏
（有限会社ＲＸ組代表　楽ワザ介護塾紫野庵主宰　介護アドバイザー）

**文部科学省　指導・講評**

○矢幅視学官より福祉を取り巻く状況等説明
・高等学校における福祉教育（次期学習指導要領審議のまとめによる、福祉科の今後の在り方について）
・福祉・介護人材確保に係る施策動向
・高校における福祉教育の実践等（冊子資料内に、Ａ５版の大きさで、置戸高校の取組として「地域との連携」が紹介される）
・各研修課程と福祉系高校に係る教員要件等

# 第６５回北海道高等学校家庭教育研究協議会を終えて

北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長
（北海道三笠高等学校長）　　佐々木　淑　子

平成２８年度第６５回北海道高等学校家庭科研究協議会が、８月２日（火）～３日（水）の日程で、北海道立道民活動センター「かでる２・７」を主会場として開催されました。

ご来賓として、北海道教育庁学校教育局高校教育課長　河　原　範　毅　様、全国高等学校長協会家庭部会副理事長（埼玉県立不動岡高等学校長）武　正　　章　様にお越しいただき、ご挨拶を頂戴しました。また、助言及び講評は北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班主査　佐　紺　摂　子　様にお願いしました。

道内の家庭・福祉に関する高等学校の校長先生並びに先生方など約100名の皆様にご参加いただいたおかげで、盛会のうちに初期の目的を達成することができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、本会の組織の元になっている北海道高等学校長協会家庭部会企画委員の校長先生方６名と全道各地より選出された運営研究委員24名の先生方及び教頭先生３名、そして事務局（三笠高校）２名は、企画・準備・運営・事後業務を担当させていただきました。

【本研究協議会　組織】は、Ｐ９　に記載

平成20年度～の運営委員会方式から平成24年度～は運営研究協議会方式になり、家庭科教員の研修は家庭科教員自らが運営を！の取組が当たり前になってきました。

さて、１日目午前中は開会式・オリエンテーションに続いて全体会Ｉとし、生徒発表・報告説明・研究発表を行いました。

【オリエンテーション】は、Ｐ10～Ｐ11に記載

生徒発表では札幌丘珠高校家庭クラブの生徒の皆さん４名が、８月４日から福島県で開催される「全国高等学校家庭クラブ研究発表大会」へ出発する前に、『防ごう！消費者トラブル！～丘珠コミュニティが見守ります～』のテーマで発表してくれました。発表者の敦賀准平さんは緊張しながらも本番前の良き練習ができたようで、大会結果は「産業教育振興中央会賞」を見事獲得することができました。この発表を直接視聴することで、家庭科教員の学校家庭クラブ活動の理解にも繋がったのではないかと思いました。その後は「家庭科技術検定の実施」について、事務局校である名寄産業高校の榊原しほじ先生より説明をいただきました。

研究発表（提言）については、石狩・日胆・釧根の３地区からで、野幌高校　池田麻子先生、室蘭栄高校　坂本洋子先生、釧路湖陵高校　相坂静香先生にお願いし、日常の実践を提言としてまとめ発表していただきました。

【提言内容】は、Ｐ12～Ｐ14　に記載

午後からは３つの分科会と校長部会に分かれて研究協議を行ないました。三分科会いずれも提言・助言・司会・記録を担当した先生方及び参加者の皆様のおかげで、意見や実践例等が活発に出され、意味ある分科会となりました。

校長部会では、全国高等学校長協会家庭部会北海道ブロック研究協議会を兼ねていることから、全国高等学校長協会家庭部会副理事長　武正章校長先生においでいただき、「全国の状況等について」の説明を、部会長からは「全国高等学校家庭部会総会・研究協議会」等について資料を基に報告いただきました。

分科会終了後は、全体会Ⅱとして再び参加者が集まり、各分科会の報告及び助言・講評が行われました。分科会それぞれにおいて、今後の指導に生かせる前向きな発言等が多く、ディスカッションも活発に行われたことが報告されました。一日目最後の佐紺主査の助言・講評では、各研究発表内容について助言と評価をいただくとともに、家庭科教育の今後の課題についても触れられ、解決へ向けては本研究協議会の意義と家庭科教員の研修がいかに重要であるかについても講評していただきました。

【分科会報告】は、P15～P17　に記載
【講評】は、P18　に記載

２日目は、受講者が選択した講座に分かれてのグループ別体験研修でした。復活した「衣文化セミナー」、洋食から和食へテーマを変えて実施した食育セミナー、地域防災に視点を当てた住生活セミナー、消費者問題や家庭経済にも話題を広げた生涯設計セミナー、どの講座においても先生方の真剣な取組が見られ、実施後のアンケートでも受講者の高い評価が得られました。それぞれの講座の講師をお引き受けくださった関係各位に感謝申し上げます。

【グループ別体験研修講座報告】は、P19～P21　に記載

以上、２日間の日程で開催された本研究協議会は、充実した研修の時間となったようです。アンケート結果に基づき、次年度はさらに内容を充実させ、本研究協議会として、これからも家庭科教育・福祉教育に関わる先生方の資質の向上を目指し、一層実り多き研修の場となるよう努めていきたいと考えています。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。そして、関係の皆様、本当に有難うございました。

【本研究協議会　組織】

1　役員

| | |
|---|---|
| 部会長 | 小　松　芳　幸（江　　別） |
| 会　長 | 佐々木　淑　子（三　　笠） |
| 副会長 | 増　田　雅　彦（名寄産業）<br>井　上　明　子（津　　別） |
| 監　事 | 田　村　俊　行（当　　別）<br>谷　坂　常　年（野　　幌） |

2　運営研究員

| | |
|---|---|
| 石　狩 | 溝　淵　和　江（札 幌 南）<br>田　中　晴　美（札 幌 東）<br>伊　藤　友　美（札 幌 西）<br>東　　昌　江（札幌手稲）<br>髙　橋　理　緒（札幌南陵）<br>野　村　良　子（札幌啓北商業）<br>筧　　理　子（札幌厚別）<br>秋　田　貴　子（札幌工業）<br>鈴　木　朋　美（江　　別）<br>今　多　靖　子（当　　別） |
| 道　南 | 工　藤　真知子（函館大妻）<br>福　田　桃　子（函館白百合学園） |
| 後　志 | 佐　藤　慈　雨（高 等 盤）<br>前　田　義　江（真　　狩） |
| 空　知 | 継　田　華　惠（滝　　川）<br>室　井　のりこ（岩見沢緑陵） |
| 上　川 | 岸　本　美　子（富 良 野）<br>榊　原　しほじ（名寄産業） |
| 留　萌 | 笠　島　絵里奈（羽　　幌） |
| 宗　谷 | 成　田　佳　織（利　　尻） |
| オホーツク | 橋　本　晶　子（遠　　軽） |
| 日　胆 | 西　山　祥　子（静内農業） |
| 十　勝 | 田　中　裕　子（更別農業） |
| 釧　根 | 加　藤　三　奈（白　　糠） |
| 教　頭 | 宮　﨑　　円（江　　別）<br>後　藤　あゆみ（夕　　張）<br>佐　野　陽　子（留 辺 蘂） |

3　事務局校（北海道三笠高等学校）

| | |
|---|---|
| 事務局長（教頭） | 太　田　和　浩 |
| 事務局員（教諭） | 小　野　晃　子 |

# オリエンテーション

北海道三笠高等学校長　　佐々木　淑　子

毎年行われている本研究協議会も６５回を迎えることとなりました。この研究協議会の開催に当たり、参加の先生方へ何点かお話しさせていただきます。

まず、昨年度の本研究協議会の終了について報告します。「生きる力をはぐくむ家庭科教育の充実を目指して」を研究主題に平成２７年８月４日（火）～５日（水）に開催しました。平成２６年度と比較して全体参加者数は若干減りましたが、これはほぼ同時期に全国高等学校家庭クラブ研究発表北海道大会があったためと思われます。また、これまでと大きく異なる点は、ホテルを会場としていた交流会をこのかでる２・７内にある「カフェ・ド・マデル」で行ったことです。お陰様で、今までになく多い５２名の参加者を得られ、大変盛り上がった交流会となりました。参加者アンケートのまとめによると、参加者の服務上の扱いについては出張扱いが最も多く７４％であり、連続参加の方が多いという結果になっています。開催日の設定については、例年より１週遅い開催であったものの適当であるという意見が多かったことから、次年度以降も８月初旬が望ましいと思われます。会場についても、駅から近いということや、体験研修会場も同会場であるということから好評でした。なお、体験研修講座につきましても、アンケートの結果をもとに今年度も４つの講座を設けました。会計報告については紙面の通りです。これまで交流会費を予算に含まずに会計報告をしておりましたが、昨年度はより情報交換の場としての交流会の在り方を検討し企画したこともあり、会計の中に組み入れて決算報告しました。残高が４，４４１円ということで少額となりましたが、繰越金として今年度の予算に計上されています。

それでは、今年度の研究協議会の実施内容等につきまして、別添冊子（黄緑色）をもとにお話しします。最初に「参加するという意識」について申し上げます。先生達自身が「自分たちの学びを深める」という目的意識をしっかり持って参加していただきたいということです。何のためにこの研究協議会に参加しているのか、何の課題を持って参加しているのか、どの発表をどのように自分の学校に生かしたいと思って参加するのか、その点を明確に意識に持って、プログラムに主体的に参加していただきたく思います。授業の時も同じですよね。目的や目標がかならずあり授業を行い、その後に評価するということです。常々「指導と評価の一体化」という言葉で表わされますが、この研究協議会に参加していただく際にも、最初に目的・目標をしっかり持ち、この１日半の日程で研究協議会に参加した結果、自分の評価はどうか、そして次に何を生かすのかを、この一連の流れの中で捉えていただきたいと思っております。

次に、研究主題「生き抜く力をはぐくむ家庭科教育の充実を目指して」についてです。十年来、同じテーマですが、それだけこのテーマが重く、そして永遠に近いテーマであるからではないだろうかと考えています。「生きる」だけではなく「生き抜く」という言葉に、家庭科教育の「強さ」

が求められていることなのです。生徒たちの実態について、さまざまな学校の色々な先生たちから「男の子たちが弱くなった」という話を聞きます。男子教育が特化されない戦後の教育も原因の一つかと思いますが、私たちの目の前にいる生徒たちが男子でも女子でも、生き抜くための強さを身に付けさせているだろうか？家庭科教育で何を教え、どのように指導すればよいのか、一緒に先生方も考えていただければ有り難いと思います。

次に、研究主題に基づいた研究の観点についてです。（1）社会の変化に対応する家庭科教育の充実を目指す教育課程の編成・実施の工夫と改善（2）基礎的・基本的な知識や技術の習得を目指す学習指導と評価の工夫と改善　（3）思考力・判断力・表現力の育成を目指す学習指導と評価の工夫と改善　（4）家庭・地域と連携した実践的・体験的な学習活動の指導を評価の工夫と改善（5）問題解決能力の育成を目指すホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の指導と評価の充実の５つとなっております。この後のプログラムはどの観点に基づいて進行しているのかですが、まずこのあと行われる、札幌丘珠高等学校家庭クラブの皆さんの発表については、観点（5）の内容に、名寄産業高校・榊原先生から家庭科技術検定について説明がありますが、これは観点（2）となります。研究発表につきましては、釧路湖陵高校・相坂先生、室蘭栄高校・坂本先生、野幌高校・池田先生、それぞれの学校規模や状況、生徒の実態、地域の環境等も違いますが、各地域でこのような実践を積み重ねて来られた先生方の発表ですから、観点に見合わせながら発表を聞いていただければと思います。そして、先生方にはこれらのご発表を自校での指導に生かしていただくようお願いいたします。

先ほど高校教育課長、河原様からもアクティブラーニングについてのお話がありましたが、私はアクティブラーニングとはできるだけ教えないことではないかと思っております。教師の授業における発言は、説明、指示、発問の３つしかありませんが、この中の「発問する」ということがいかに生徒たちに考えさせたり、思考を深めさせたりすることに繋がるかということです。授業の時には私も沈黙が怖いので、何か喋っていないと何となく追いつめられる感じがしていましたが、実はこの沈黙もとても大切だと思っております。ですから、アクティブラーニングというのは、できるだけ教えないこと、教え込まないこと、沈黙をあえて向かい入れることです。では何をすればいいのかというと、その間できるだけ考えさせること、できるだけやらせること、できるだけ話し合わせることだと思います。

そして、情報が溢れる時代ですが、偽物ではなく本物を教えてください。真実は何なのか、本筋そして本物は何かというところにも視点を広げ、授業を構築していただきたく思います。そのためにも先生方お一人お一人が自身の学びを深め流ことが必要です。学び続けることは家庭科に限らず、教師の使命だと考えております。

人間育成の場の一つを担う家庭科教育であり、幸せを求める家庭科教育でもあります。私たちは家庭科教員として自信、プライドをもって家庭科教育の推進に当たっていきましょう。この研究協議会がその一助となりますよう、大いに期待申し上げ、オリエンテーションといたします。

# 提言１　アクティブラーニングにおける指導と評価の工夫・改善

## ～ルーブリックによる評価とグループ学習を取り入れた授業実践～

北海道釧路湖陵高等学校　　相　坂　静　香

Ⅰ　はじめに

本校は、文部科学省からスーパーサイエンスハイスクールの指定を受け、アクティブラーニングを活用して生徒が「主体的・協働的に学ぶ態度」を高めるための様々な取組を行っている。その中でもルーブリックの活用についての研究は、全教科において実践が進められている。本教科においてもルーブリックを活用し授業改善に取り組んでいるので、その成果と課題について報告する。

Ⅱ　実践内容、評価・指導法の工夫改善

１　ルーブリックの活用について

（１）グループ学習のルーブリック

これからの社会を担っていく生徒たちに身に付けて欲しい「思考力」や「実践力」に関する項目について評価基準を明確に示し、授業に取り組む前に共通理解を図ることができるようにした。

（２）発表に関するルーブリック

お互いの発表を客観的に評価できるよう事前に≪発表に関するルーブリック≫を熟読させ、具体的な例を示すことによってイメージを膨らませることができるようにした。また、他の班からの評価をフィードバックすることにより、メタ認知能力の向上を目指した。

２　グループ学習におけるルーブリックの活用について

（１）授業の進め方について

１年生普通科５クラスを対象とし、５人１組で保育分野に関連するテーマ決定、情報収集・調査をし、ビジュアルプレゼンターを用いて発表した。

（２）発表の評価について

発表に関するルーブリックは、他者評価と自己評価の２種類用意した。評価には必ず感想や助言を記入させ、班内で話し合った結果を班の評価として提出させた。後日、家庭科教員評価、自己評価、他者評価を数値化した結果を生徒に配布・還元した上で自己評価シートに班としての考察を記入させた。

Ⅲ　成果と課題

多くの生徒がルーブリックによる評価とグループ学習について肯定的に捉えていることがわかった。また、事前にルーブリックやグループ学習の目的や意義、目標を提示することで、自分たちに求められている力は何かを理解し取り組むことができたと考えられる。さらに、生徒には受動的な学習から能動的な学習への学習態度の変化が見られ、学習意欲を向上させる効果が高まることがわかった。

今後の課題としては、生徒の学力や理解力に合わせた表現や内容にすることでよりルーブリックによる評価やグループ学習の効果を高めること、メタ認知能力のさらなる向上を図ることが必要である。

Ⅳ　おわりに

本校では、生徒の自己学習力や探究心の向上などを目指して学校全体でアクティブラーニングや評価の改善に取り組んできた。本取組を今後も継続・発展させ、生徒に知識・技能だけでなく、思考力や判断力、表現力を身に付けさせるより良い授業づくりを目指し取り組んでいきたい。

# 提言２　生徒の主体性を育む、ＳＳＨにおける「基礎課題研究」の実践について

北海道室蘭栄高等学校教諭　坂　本　洋　子

## １　はじめに

本校は、平成21年度より文部科学省スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）の指定を受けている。その活動の中のひとつである「基礎課題研究」で、１チーム（１年生理数科４名）が家庭科の内容について取り組んだ。その活動の一部を報告する。

## ２　実践内容

### (1)ねらい

「基礎課題研究」の活動を通し、生徒に家庭科分野に興味・関心を持たせること、主体性を育むことをねらいとしている。

### (2)研究内容

「寝かせ玄米とは何なのか調べる」「寝かせることよって玄米にどのような変化が起こるのか観察・実験を行う」「結果をポスター発表する」という流れで行った。

活動全般において、なるべく生徒が主体的に考え、行動できるよう指示ではなく提案や投げかけにし、生徒がメインで動けるよう心がけた。

### (3)評価

①４つの観点（「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」）によって評価する。

②①の４つの観点に加え、「基礎課題研究」は、学校設定科目「サイエンス基礎」の一部であるため、担当するＳＳＨ推進部から示された評価規準を加味し、総合的に判断し１０段階で表す。

### (4)考察

半年間の取り組みで、生徒が興味・関心を持ち、次のように活動に主体性が見られた。

・自らの疑問や意見を出せるようになった。
・ｸﾞﾙｰﾌﾟでの話し合いや作業がｽﾑｰｽﾞになった。
・ｸﾞﾙｰﾌﾟ以外の生徒や先生とｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝを取り、情報交換できるようになった。
・発表の際、聞き手を惹きつけるための工夫を提案し実際に取り組んだ。

「基礎課題研究」の活動を精査し、「家庭基礎」に取り入れることができれば、さらに家庭科に興味・関心を持つ生徒が増えるのではないかと考える。そして、興味・関心が深まることに比例して主体性が身に付いていくことに繋がり、学習効果も高められるのではないかと考える。

## ３　おわりに

この取り組みにより、家庭科分野に興味・関心を持たせることができた。また、生徒が主体的に取り組むことによって、思考力・判断力・表現力を身に付けることに繋がった。

研究を深めて行く中で、生徒は課題を解決するには、ひとつの教科だけでなく様々な教科の知識や技術が必要であることを感じたようである。また、生徒から「もっと知りたい」「もっと調べたい」の声もあがっていた。それらのことより、身近で実生活に関わる「家庭科」こそが、さまざまな分野に興味・関心を持たせるきっかけになるのではないかと思った。まさに家庭科自体が、キャリア教育につながると考える。

# 提言３　生徒自身が作成する試験問題の活用による意欲、関心の育成について～消費生活に関する副読本の利用から～

北海道野幌高等学校教諭　池　田　麻　子

１　はじめに

本校では平成２０年度から道内初のフィールド制（４フィールド）を導入し、選択方法によっては家庭科に関わる科目を最大９単位修得して卒業している。

また、「生活と地域」（学校設定科目）（「ライフサポート」フィールド生徒の選択科目）を設定し、福祉と住生活について学習を深めている。

「生活と地域」は選択授業であるため、人間関係が希薄であり、言語活動の充実が求められるなか、生徒同士で発表したり、意見を交換したり、討論をしたり、話し合う活動を行うことが難しい。

そこで、説明や、発表を主にせず、生徒が集めた情報を整理・分析し、論理的にレポートにまとめて表現することを主とし、生徒自らが問題を作成することを切り口として取り組んだ。

２　授業実践について

３年生の学年末に今まで学んだまとめとして、『はじめての一人暮らしガイドブック～部屋探しと生活のルールとマナー～』（公益社団法人全国宅地建物取引業協会連合会・全国宅地建物取引業保証協会著）を活用し、試験問題の作成を通じて学習意欲の向上と言語活動の充実を目指した授業実践を行った。

（１）単元の指導計画（全10時間）

①キーワード探し②集約

③ダイヤモンドランキング作成

④～⑥手書きの問題を解く

⑦～⑩パソコン入力された問題を解く

３　実践の考察

「生徒の皆さんが作った問題を、定期考査問題に採用します。」と伝えても、何をどうしたらよいかわからず、最初はパンフレットを読むだけしかできなかった生徒も、他の完成した生徒の問題を見て何をしたらよいかを他の生徒から学んだ。

教える側の時にまじめに取り組み、苦労して多くの問題を作成した生徒は、解答する側になったときも意欲的に学習に取り組んでいた。

さらに、パソコンに入力する際に言葉遣いを統一するなど、工夫・改善することにより、作成した生徒自身が気づかないほどの良い問題になった。意見交換や、発表・討論をしなくても、互いの問題から学ぶことができたことから、問題を作ることによって、学習に対する関心・意欲を高めることができた。

４　今後の課題

この実践を発展させ、教師役・生徒役のロールプレイをしたり、各自の感想を発表させたりするなど言語活動をさらに充実させ、生活の質の向上と社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てたい。さらに、お互いの考えを発表し合ったり、説明するなど、伝え合うことで自分の考えや集団の考えを共有し合う主体的・協働的な学びも実践していきたい。この問題の作成を通して得た経験を意思決定や問題解決に活用することができる学習活動をすすめて、学習意欲の向上に結びつけたい

# 第 1 分 科 会 報 告

函館白百合学園高等学校教諭　福　田　桃　子

■提言に関する質疑応答

（質問）実習のルーブリック評価作成は実技ごとか単元ごとか。（回答）現在保育と被服で実施しているが、被服はボタン付けとまつり縫いでルーブリックを作成した。今回のものは完成に５時間以上かかっており、年に１つのペースで作っている。今年は調理実習について作成中。

（質問）保育のグループ活動における情報収集の手段は。（回答）昼休みや放課後にインタビューを行っている。調べ学習は家庭で行えるよう、土日をはさんで課題を出すようにしている。

（質問）グループ学習に入っていけない生徒に対してどのようにフォローしているか。（回答）班長を呼んで学習の目的を理解させ、全員が話してほしいと伝えている。

他にも多くの質問をいただいた。

■各校の取り組み報告

参加した先生方より各校での取り組みを発表していただいた。

■提言者からの補足説明

グループ演習に先立ち、以下のように補足をいただいた。

・項目は小さなキーワードで示すと良い。

・B（おおむね満足）の評価基準を先に決めると決めやすい。

・達成度は明確にするべきで、生徒が読んで理解できるように文章を書く必要がある。

・１人よりは５～６人で作るとやりやすい。

■グループ演習

５班に分かれてルーブリックの作成実習を行った。題材はボタン付けの実習とし、ABC の３段階評価で作成することとした。40 分間の演習のあと、各グループより簡潔に報告をしていただいた。

この活動を受けて提言者より以下のようにアドバイスをいただいた。

・「上手に」「ちゃんと」といった表現では生徒に伝わらないことや、ルーブリックは教員が変わっても使用できることが前提であることから、数値を具体的に示す必要がある。

・場合によっては空欄があることもあり得る。

■助言者からのまとめ

○江別高等学校　宮﨑　円　教頭先生

次期学習指導要領改訂に向け、指導と評価の一層の充実が重要になってきている。知識や理解・技能といった結果を的確にとらえることはもちろん必要であるが、生徒自ら問題を発見し、解決する思考力や判断力をどのように評価するかということが求められている。そうした中、ルーブリックは評価の「ものさし」であり、生徒にとって自らの立ち位置を把握し学習意欲の向上が図られる。このぶれない「ものさし」は多面的な評価につながるとも考えられる。また、家庭科で学んだことを小さな工夫につなげ生活を豊かにするということがホームプロジェクトの原点であると考え、日々の指導から実践につなげてほしい。

○岩見沢西高等学校　若藤　正彦　先生

家庭基礎の限られた時間の中でも発表の時間を計画的に組み込めていた。また、自他の評価をすぐにフィードバックしていた。生徒は評価を知りたがるもので、すぐにわかると改善しやすい。ルーブリックは生徒と教師が同じ方向を向ける手段であり、これまで口頭で示してきたことを明確にするためにも有効だと言える。今後の課題として、生徒の意欲を引き出すための工夫と観点別評価への落とし込み方を考えていく必要がある。

# 第 2 分 科 会 報 告

北海道札幌啓北商業高等学校教諭　野　村　良　子

■提言に対する質疑応答

【質問】学校設定３単位分は、何を削ったのか。

【回答】１年の家庭基礎を１単位にし、後期にまとめて履修した。

【補足】理数科におけるＳＳＨ指定では、家庭基礎・情報を課題研究で代替できる（後藤教頭）。

【質問】評価のばらつきを無くすための工夫は。

【回答】他チームとの調整は全体としては行わなかったが、個別に他の先生から情報を集めた。

【質問】ブースでの発表は、どうような形式か。

【回答】６０分の中で１０分位の発表を４回程度行い、それを自由に聞く形式とした。

■研究協議

２グループに分かれ、２つの柱それぞれについて①付箋への記入②付箋を貼りながら説明③まとめの発表 を行った。

【協議の柱１】問題発見・解決学習

これまでの実践として、特産品を使ったレシピや地産地消メニューの開発、自分が住みたい部屋の平面図作りなどがあった。今後実践したいものとしては、郷土料理作りや給食の献立作成、高齢者の病気予防に効果的な料理の開発、一人暮らしのシミュレーションなどが出された。地域と食に関するもの、卒業後すぐに活かせるものを取り上げたいという意見が多かった。

【協議の柱２】観点別学習状況評価の課題

実習や作品の評価が難しいという意見が出された。「関心・意欲」の評価方法や自己評価の取り入れ方についても苦労されている先生が多かった。また、特別な配慮を必要とする生徒の評価をどのようにするか、評価について生徒にどのように説明すればよいかなどの話し合いが行われた。丁寧な評価は大事であるが、効率的な方法を考えることも重要ではないかという意見もあった。

■助言者からのまとめ

○北海道当別高等学校　　今多　靖子　先生

課題研究における事前の提示資料、道筋を示しながら進める点が参考になった。課題研究では生徒の学びと成長がよく見え、グループでの役割分担で生徒の適性・能力を発見することもある。しかし題材の設定・進め方・まとめ方など、教える側が目標とするところを決めなければ、まとまらずに終わることもある。課題研究として取り組める内容として「調査研究」「就業体験」「資格取得」「学校家庭クラブ」の４つがあるが、学校の状況や生徒の希望で選択できる。問題発見・解決学習を、個人ごとのテーマとして取り組むのがホームプロジェクトである。授業の題材を家庭へ持ち帰り話題にすれば、それもホームプロジェクトへとつながっていく。また「検定」は評価の観点を学ぶうえで参考となるので活用して頂きたい。

○北海道夕張高等学校

教頭　後藤　あゆみ　先生

他教科と横一列での研究・発表は貴重な体験であり、本提言でそれを共有できたことはよかった。全校で取り組んでいる「グッジョブシール」は全員の意見を取り上げるうえで有効であると感じた。また最初に道筋を提示する点、発表を通じて研究内容を共有する点は家庭科でも活かせる。生徒は情報収集が得意だが、それが正しいかの判断が出来ない場合もあるので教師の関わりが必要だ。今、「何を教えるか」ではなく「どのように学ぶか」が重要であり、そのツールがアクティブラーニングである。社会に開かれた教育課程という点では、インタビューを校内だけでなく市役所や会社で行うという方法もある。また他教科との連携はカリキュラム・マネジメントの１つとして必要である。評価は、それぞれの生徒を目標まで引き上げるためのものであると考えて頂きたい。

# 第 3 分 科 会 報 告

北海道羽幌高等学校　笠　嶋　絵里奈

■提言者に対する質疑応答

（質問）この取り組みはいつから始めたのか。（回答）昨年度より実施している。（質問）言語活動の充実をはかるための手立てとして、試験問題の作成になぜ繋がったのか。（回答）「はじめての一人暮らしガイドブック」～部屋探しと生活のルールとマナー～を利用し、キーワードを９つ記入させたり、ダイヤモンドランキングを作成させたりすることで、言語活動の充実に繋がると考えた。

■研究協議テーマ

①基礎的・基本的な知識・技術を習得させるために日頃の実践で工夫していること

②観点別評価について、実践例と苦労している点や工夫・改善点

３つのグループに分け、この２つのテーマについて情報交換を行った。

■グループ協議（３グループ）のまとめ

テーマ①基礎的・基本的な知識・技術を習得させるために工夫していることについては、授業で保育人形や見本など、実物を持って行くようにしていることや、縫い方の動画を自分で作成し見せることなど視覚にうったえる方法を実践している学校が多かった。また、家庭科技術検定の内容や評価用法を用いて授業を作っている学校も多かった。技術検定は、評価基準がはっきりしており、その目標に向かってしっかり学習することができる。それが基礎的・基本的な知識・技術を習得することに繋がっているのではないかと話し合いが進められた。さらに、基本的な知識を得た後の応用として、発展的な知識・技術を身につけさせることも必要なのではないかと、課題も上がった。

テーマ②観点別評価の工夫については、集計が大変にはなるが、考査問題に観点を記載することは意識づけをするのに効果的なので実践したいというという意見がたくさんでた。また学習の成果を評価すると、それが生徒の自信になり、生徒自身が自分の能力に気付くことができる。学ぶ意欲を高めるためにも細かな妥当性のある評価が必要であることを確認できた。

■助言者からのまとめ

○札幌厚別高等学校　　坂口　真奈美　先生

「人づくり」として、３年生に仕事のやり方を伝える素晴らしい取り組みだと感じた。卒業後、この取り組みがどう発揮されていったのかを聞いてみたい。

家庭科という教科はアクティブラーニングを取り入れやすい教科の１つである。工夫して積極的に取り入れていくと良い。

○留辺蘂高等学校教頭　　佐野　陽子　先生

学習意欲が上がらない生徒への取り組みとして良い内容だと感じた。思考力・判断力の育成のため、生徒の実態をよく考えた方法である。

生徒は「わかった」「できた」と感じる時に学習意欲が増すものであるため、評価は信頼性・妥当性・客観性の３つを意識し、より効果的に学ばせるようにするとよい。

# 平成28年度第65回北海道高等学校
# 家庭科教育研究協議会講評

北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班　主査　佐　紺　摂　子

日頃から本道の家庭科教育の充実・発展のために御尽力いただいておりますことに深く感謝申し上げます。

最初に、札幌丘珠高校家庭クラブの皆さんの発表は、大変素晴らしい発表でした。是非、今月４日からの全国大会でも、ホームプロジェクトの代表である札幌北高校ともども、平常心で、実力を発揮してきていただきたいと思います。

名寄産業高校　榊原先生からは、家庭科技術検定のお話がありました。生徒に実践的な力を付けるために家庭科技術検定を積極的に活用していただくようお願いします。

次に、提言についての講評を申し上げます。

釧路湖陵高校の相坂静香先生のご提言は、ルーブリックを活用した授業改善の取組でした。

スーパーサイエンスハイスクールの指定を受け、「アクティブ・ラーニング」の視点から、生徒が「主体的に学ぶ態度」を高めるための様々な取組を行っており、ルーブリックの活用についての研究については、全教科において実践が進められていることも大きな力となったことと思います。

ルーブリックによる評価については、綿密に計画を立て、実施し、振り返ることによって、生徒の学習意欲を高めることができたことが本実践の成果であると考えます。これは、評価をする上で、欠かすことのできない点です。

また、冊子の４ページの家庭基礎のシラバスの学習方法②に、「授業で学んだことを家庭で話し合う時間を取り、生活に当てはめ定着を図ること」とありますが、非常に大切な視点であると思います。

今後の課題としては、ルーブリックの精度をなお一層高めることであると考えます。ルーブリックは、教師と生徒が協同するのを助けると言われています。目標を共有しない協同はあり得ませんので、授業のねらいを生徒にきちんと伝え、その成果をまた全道に普及していただければと思います。

室蘭栄高校の坂本洋子先生のご提言は、スーパーサイエンスハイスクール指定事業における学校設定科目「サイエンス基礎」の中の「基礎課題研究」で家庭科の内容に取り組んだ実践でした。

教員の働きかけとして、生徒が主体的に考え、行動するように、指示ではなく投げかけの姿勢を取ったこと、疑問に思ったことはグループで話し合うなど、コミュニケーションを取ることを重視したことは、参考になる点であったと思います。また、他教科の先生から知恵を借りたり、グッジョブシールを活用するなど、工夫されていました。

私たちは、家庭科教育を担うものとして、栄養学的に客観的な証拠があるのかどうか確認しておく必要があります。

今後の課題は、高校生の発達段階を踏まえ、より科学的に理解させること、地域の人材を活用することを重視することです。

本実践を学校家庭クラブ活動やホームプロジェクトなどの授業にも取り入れていただき、評価等も検討され、これからも、家庭科の重要性を生徒や先生方に伝えていっていただきたいと思います。

野幌高校の池田麻子先生のご提言は、試験問題の作成を通じて、生徒の学習意欲の向上と言語活動の充実を図った実践でした。

過去の研究会等で学ばれたダイヤモンド・ランキング等を自校の生徒に合わせた形で活用するなど、非常に前向きであると感じました。

課題は言語活動のさらなる充実です。

先生ご自身が話されていたように、教師役、生徒役のロールプレイやペアでの意見交換などの言語活動を充実し、生徒の思考力・判断力・表現力を育んでください。

最後に、細やかな心配りで本研究協議会を成功に導いてくださいました事務局校・運営研究員の教職員の皆様をはじめ関係各位に厚く御礼を申し上げ、講評といたします。

# グループ別体験研修報告

| A | 衣文化セミナー |
|---|---|

1　主な内容

① 講義「継承したい日本の文化や心」

② 体験「十二単の着装披露と着装体験」

2　参加人数　１２名

3　講　　師

ＮＰＯ法人日本時代衣装文化保存会理事

小林豊子きもの学院北海道本部学院長

信田　豊愁　氏

4　会　　場　小林豊子きもの学院

［　研修内容・成果　］

前半は、「五節供の歴史と文化」、「日本の文化(心)」と題して各節句の成り立ちや儀式にこめる願い、陰陽五行説について講義を拝聴した。それぞれの節句について、供物として用いられる植物や食べ物、色などにこめられる無病息災の祈りや願いを丁寧に説明していただいた。日常生活において、四季の変化や旬の食材を敏感に感じ取り、それを生かして間接的に家族を思い合う表現方法の一つとして、今後も継承していく必要があると強く感じ、あらためて五節句など年中行事の大切さについて、理解を深めることができた。

後半は、十二単について、重ね方や色目、平安時代の「空蝉」「打出」などについて解説していただきながら、着装の仕方などを見学した。その後、参加者全員が実際に着装し、その重みや歩きにくさを体験し、講座を終えた。歴史などを絡めた大変充実した研修となった。

［講座担当者］

夕張高等学校　後藤あゆみ

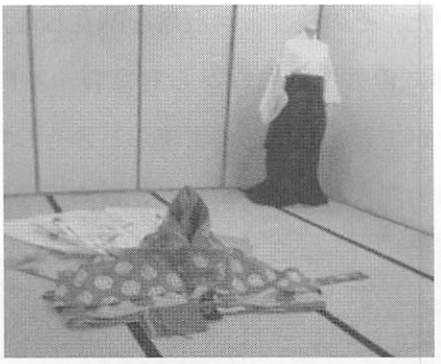
札幌工業高等学校　秋田　貴子

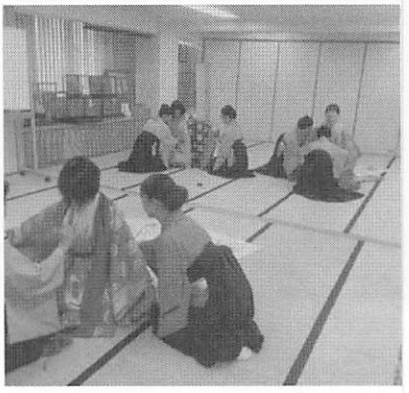
札幌厚別高等学校　筧　理子

函館大妻高等学校　工藤真知子

滝川高等学校　継田　華恵

三笠高等学校　小野　晃子





| B | 食育セミナー |
|---|---|

1　主な内容

「日本料理の出汁と光塩伝統の赤飯を活かしたミニ会席仕立て」

①軟水・硬水を使って利き出汁の講話

②光塩学園伝統の甘納豆赤飯の講話

③ミニ会席試食

2　参加人数　１７名

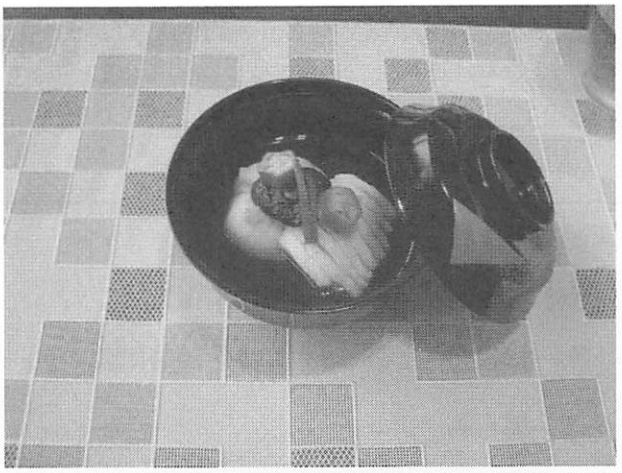
3　講　　師　光塩学園調理製菓専門学校

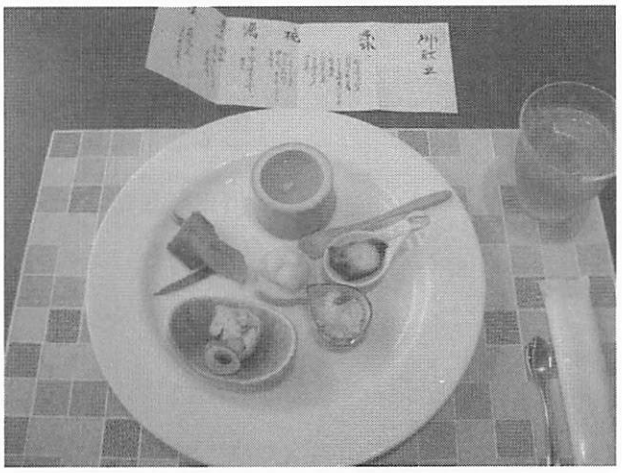
日本料理講師　　田安　透　氏

4　会　　場　光塩学園調理製菓専門学校

【研修内容・成果】

はじめに、日本料理の出汁についての講話をしていただいた。次に軟水と硬水を使って出汁を取り試飲をした。昆布とかつお節のうまみを引き出すには軟水で取るほうがおいしいことが分かった。次に光塩学園伝統の甘納豆赤飯の講話を聞き、煮物の鯛赤飯のデモンストレーションをしていただいた。その後、ミニ会席を試食した。おいしい料理に舌鼓を打ちながら有意義な時間を過ごすことができた。出汁の素晴らしさそして日本料理の奥の深さを改めて実感した研修となった。





【講座担当者】

札幌南高等学校　溝淵　和江

札幌西高等学校　伊藤　友美

札幌手稲高等学校　東　昌江

札幌南陵高等学校　高橋　理緒

利尻高等学校　成田　佳織

| C | 住生活セミナー |
|---|---|

1　主な内容

①講義　「地震に強い住まい」

「災害への備え」

「防災教育に役立つものの紹介」

②体験　「紙ぶるる」の製作

2　参加人数　２２名

3　講　　師　北方建築総合研究所

地域研究部　居住・防災グループ

主査（地域防災）竹内　慎一　氏

4　会　　場　北海道立道民活動センター

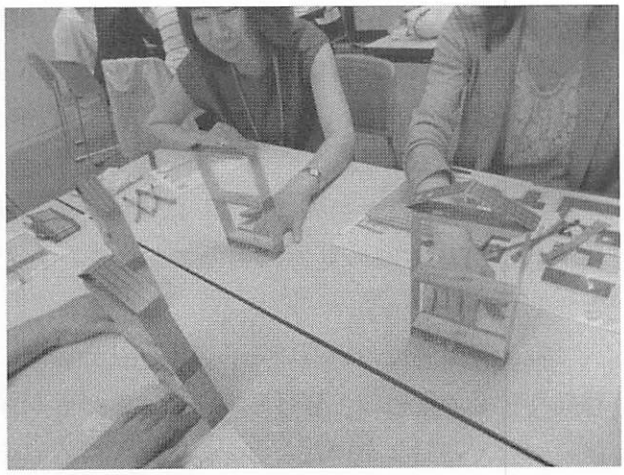
「かでる２・７」６１０会議室

【　研修内容・成果　】

講義では、地震や冬の災害による住宅被害について、これまで実際に起こった住宅被害の状況と原因について教えて頂いた。簡単にできる耐震診断を紹介して頂き、自分の住む住宅が安全なのかを確認し、適切な耐震改修やメンテナンスをしていくことが大事であることを学んだ。また、普段からできる防災対策や、非常時持ち出し品の紹介もして頂いた。一人ひとりがいざという時のために、非常時持ち出し品の重要性を知り、日ごろから準備していくことが大切だと感じた。

体験では、「紙ぶるる」という地震に弱い建物の特徴を実験しながら楽しく理解できるペーパークラフト教材の製作を行った。完成した「紙ぶるる」を自分で揺らして、どんな時に大きく揺れるか、どうしたらあまり揺れなくなるのかを体験し、家の壁に強さを確保するために使われている筋交いの重要性についても実感することができた。

講義も体験も大変興味深い内容で、今後の授業のヒントをたくさん頂いた充実した研修となった。



【講座担当者】

| | |
|---|---|
| 江別高等学校 | 宮崎　円 |
| 江別高等学校 | 鈴木　朋美 |
| 更別農業高等学校 | 田中　裕子 |
| 遠軽高等学校 | 橋本　晶子 |
| 静内農業高等学校 | 西山　祥子 |
| 羽幌高等学校 | 笠島絵里奈 |
| 名寄産業高等学校 | 榊原しほじ |
| 富良野高等学校 | 岸本　美子 |
| 高等聾学校 | 佐藤　慈雨 |
| 真狩高等学校 | 前田　義江 |

| D | 生涯設計セミナー |
|---|---|

日　時：８月３日　９：３０より
会　場：かでる２・７　１１０会議室
講　師：北海道金融広報アドバイザー
須藤　臣　様
参加者：２５名

■講義

「社会人になる前に知っておきたいマネープラン～トラブルに巻き込まれないために～」をテーマに、「社会人になるための経済学」「社会保障制度のいろいろ」「多重債務から身を守るために」「若者が狙われやすい悪質商法」について講義をしていただきました。

「社会人になるための経済学」については、勤務形態や給与明細の見方についてお話をいただきました。

「社会保障制度のいろいろ」では、社会保険の種類や年金の仕組み、暮らしのリスクと必要な保険についてお話しをいただき、公的保障の内容や本当に必要な私的保険について具体的に学びました。特に若年者における生命保険の必要性に関しては実際に近い例を見ながら教えていただき、高校家庭科で取り扱うことの大切さを再認することができました。

「多重債務から身を守るために」では金利のことや債務整理の主な種類について学び、最後に、「若者が狙われやすい悪質商法」については道や市町村に相談窓口があることを確認しました。

■質疑応答

資産運用について教科書に載っているがどう取り扱うべきかという質問に対し、学生時代にそのような話をすると、投資はしなければならないものだと考えてしまう恐れがあるので、必ずしも得をするわけではないことを伝えていくと良いというお答えをいただきました。

併せて、公務員にも勧誘のあるワンルーム投資等については、ローンの金利や家賃改定についてよく確認する必要があり、維持費ばかりかかり元が取れないこともあるので、場合によってはきっぱり断ることも必要であるとお話しいただきました。

【講座担当者

| | |
|---|---|
| 夕張高等学校 | 後藤あゆみ |
| 札幌東高等学校 | 田中　晴美 |
| 当別高等学校 | 今多　靖子 |
| 札幌啓北商業高等学校 | 野村　良子 |
| 函館白百合学園高等学校 | 福田　桃子 |
| 白糠高等学校 | 加藤　三奈 |

# 北海道高等学校長協会家庭部会　調査研究委員会報告

調査研究委員長
（北海道津別高等学校長）井　上　明　子

1　研究主題

問題解決能力、意思決定能力等を育成する家庭科教育の在り方

2　平成28年度調査研究委員：　◎委員長

| | |
|---|---|
| ◎井上　明子（津別） | 佐々木淑子（三笠） |
| 大鐘　秀峰（札幌北） | 田村　俊行（当別） |
| 小路　修司（千歳北陽） | 谷坂　常年（野幌） |
| 山本　明敏（釧路明輝） | 武田　久（倶知安） |
| 増田　雅彦（名寄産業） | 花田　祐治（置戸） |
| 小池　博志（更別農業） | 清澤　智克（苫東） |
| 池田　延己（函館大妻） | 鈴木　譲二（江陵） |

3　調査研究の視点

将来の変化を予測することが困難な時代において、現行の学習指導要領の趣旨を踏まえつつ家庭科教育を充実させるための視点を４つ定めた。この中でも次期学習指導要領の改訂に向け「課題の発見・解決に向けた主体的・対話的で深い学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）」による授業改善が推進されていることを背景に今回の調査研究においては、４点目の問題解決能力、意思決定能力を育成する指導の充実に焦点を当てて取り組むこととした。

(1) 社会の変化への対応として家庭科に求められる内容の充実

(2) 生活の実践力（できる力）を育成する指導の充実

(3) 生活を総合的にマネジメントする能力を育成する指導の充実

(4) 問題解決能力、意思決定能力を育成する指導の充実

4　調査研究のスケジュール（平成27年４月から平成29年３月までの２年間）

(1) 調査研究内容の検討・決定
平成27年４月～５月

(2) アンケート調査の配信・実施
平成27年９月～10月

(3) アンケート調査・集計・分析・まとめ
平成27年12月～２月

(4) 実践事例の収集、指導資料の内容検討
平成28年２月～８月

(5) 実践事例、指導資料の編集・まとめ
平成29年２月

5　調査研究内容

(1) アンケート調査実施・集計、分析

「家庭科教育の在り方及び実施状況」に関するアンケート

(2) 家庭科実践指導資料集の構成・ねらい

ア　アンケート結果からの課題の整理・焦点化

・課題１　「ホームプロジェクト」「学校家庭クラブ活動」が共通教科「家庭」の３科目いずれにおいても「学校家庭クラブ連盟」加盟・未加盟に関わらず必修指導項目である認識が低い。

・課題２　基礎・基本の習得が優先され、問題解決型学習である「ホームプロジェクト」「学校家庭クラブ活動」それぞれが総指導時間数１時間以下である学校が４割を越え、十分に指導時間が確保されていない。

・課題３　すでに実践している優れた体験的・実践的学習活動や、校内外で行っている様々

な教育活動が、個別に総花的に実施されがちである。

イ　課題解決の方策＝指導資料集のねらい

・ねらい１（課題１の解決方策）

「ホームプロジェクト」「学校家庭クラブ活動」の指導に当たって留意すべき点など、Ｑ＆Ａを作成し、研究協議会、管内の家庭科研究会等、その他家庭科教員の研究の機会に紹介し、内容の周知を図る。

・ねらい２（課題２の解決方策）

「どのように学ぶか」の観点から問題解決型学習へ発展させる具体的な指導方法の工夫・改善に向け単元計画、本時の指導案、参考資料、ワークシート等を提供する。

・ねらい３（課題３の解決方策）

ねらい（身に付けさせたい力）「何ができるようになるか」を定め、年度当初から系統的・計画的に教育課程へ位置付け実施できるよう年間指導計画例を提供する。

ウ「ホームプロジェクト」「学校家庭クラブ活動」を実践するに当たってのＱ＆Ａ

・ねらい１（課題１の解決方策）を明確にしたＱ＆Ａを提示する。

・昨年度実施したアンケート調査から明らかになった課題を中心に編集する。

エ「家庭基礎」「家庭総合」の年間指導計画

・ねらい３（課題３の解決方策）を明確にした指導計画を提示する。

オ　ホームプロジェクト・学校家庭クラブ活動の取組事例

・ねらい２（課題２の解決方策）

ねらいを明確にした取組事例を提示

(ｱ) ホームプロジェクト指導例（事例数：２）

・単元計画、本時の指導案、参考資料、ワークシート等

＜実践事例１＞「家庭基礎」ホームプロジェクトにおける生徒と教員の対話による課題発見・計画までの実践例（小規模校向け）

＜実践事例２＞「家庭基礎」ホームプロジェクトにおける成果発表会の効率化を図った実践例（中～大規模校向け）

(ｲ) 学校家庭クラブ活動、学校家庭クラブ活動に関連させた指導例（事例数：２）

・単元計画、本時の指導案、参考資料、ワークシート等

＜実践事例３＞「家庭基礎」における高齢者施設訪問・交流から学校家庭クラブ活動に発展させた実践例

＜実践事例４＞地域食材を使った地域連携・まちおこし活動から学校家庭クラブ活動に発展させた実践例

(3) 実践指導資料集の掲載方法

ア　別冊「家庭科実践指導資料集」として発行する。

イ　(2)のオの取組事例(単元の指導計画、本時案、ワークシート等)については、今年度は欲張らず、２例ずつとする。

次年度以降も継続的に紹介することにより、掘り起こしもでき、よりよい実践にもつながり、発展性が期待できる。

(4)　今後の活用方法

ア　道教委指導主事等や家庭科の教頭・家庭科教員と連携し、事例交流の取組を、道教委の教育課程研究協議会、８月の全道家庭科教育研究協議会、管内家庭科教育研究協議会や初任研、10年研などでも広げる（各自の資料を同じ様式で作成して持ち寄り、交流する）など活用を図る。

イ　家庭科の教頭、家庭科教員を巻き込み、継続できる取組にする。

# Ⅱ　平成２８年度北海道高等学校家庭クラブ連盟活動報告

# 平成28年度北海道家庭クラブ連盟の活動について

北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長
（北海道札幌北高等学校長）大　鐘　秀　峰

平成 28 年度北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動報告にあたり、日頃より本連盟の諸活動にご支援、ご協力をいただいていることに心より感謝申し上げます。全国的に加盟校数の減少という課題を抱えながらも、本道の家庭クラブ連盟の活動の質は高く、全国大会において確実な成果を残しているのも皆様のご支援の賜と考えております。

さて、今年度の第 64 回全国家庭クラブ研究発表大会は 8 月 4,5 日、福島県郡山市で開催され、「福島でむすんだ絆はなさずに　ありがとうを全国に」をスローガンに全国から 1,300 人を超える高校生が参加し、福島県の高校生の多彩なおもてなしにより全国の家庭クラブ員が交流を深めることができました。東日本大震災から 5 年が経過し、全国からいただいた支援に対する感謝の思いと高校生が元気に活動する姿を届けたい、そんな強い思いが伝わった感動の大会でした。

大会発表では、ホームプロジェクトの部で札幌北高校の黒須玲未さんが、学校家庭クラブ活動の部で札幌丘珠高校がそれぞれ全国 2 位に相当する産業教育振興中央会賞を受賞しました。実用的・日常的なテーマの研究や、地域に根ざした活動が評価されたものと思います。今日、私たちを取り巻く日本社会は、国際化・情報化・ICT 化が進展する一方で、環境問題の深刻化、少子高齢化の一層の加速など様々な課題を抱えています。そのような中、真に豊かな住みよい社会をつくるために家庭生活や地域の実状を見つめる視点から実践研究を進めることは、将来社会を支える人材育成のためにもとても意義のあることだと考えます。

次いで、9 月 15,16 日の両日、平成 29 年度の長崎での全国大会の予選を兼ねて、道家庭クラブ連盟第 1 回研究大会・総会が当番校札幌南高校で開催されました。その結果、ホームプロジェクトの部で「もし家にいるとき災害がおきたら～自分の命を守るために～」と題して江別高校の河野美友さんが、学校家庭クラブ活動の部では、「KUKKOU INTERNATIONALIZATION PROJECT」と題して、倶知安高校家庭クラブがそれぞれ最優秀賞を受賞しました。両校には長崎大会での健闘を大いに期待しています。

これからの活動としては、2 月 4 日に東京家庭クラブ会館で開催される全国高等学校家庭クラブ連盟第二回ブロック代表者会議に出席し、各ブロックからの報告や、家庭クラブの活性化方策について意見交換をしてきます。その後、2 月 17 日に第 2 回研究協議会が札幌北高校で開催されます。内容は、平成 28 年度の事業中間報告、収支決算報告案のほか、全道研究大会について報告した後、平成 29 年度に向けた活動の計画や予算案を協議していきます。

家庭クラブ活動では、次期学習指導要領で謳われている「主体的・対話的な深い学び」が以前から実践され、確かな成果を上げてきました。これからそのような深い学びが一層求められることを考えると、家庭クラブ活動をとおして社会で生きる力を生徒に確実につけることができるはずです。今後とも家庭クラブ活動への積極的なご協力をお願い致します。

# 第５７回全国高等学校家庭クラブ指導者養成講座に参加して

北海道当別高等学校教諭　　村　田　ひろ美

第５７回全国高等学校家庭クラブ指導者養成講座が、７月２１日、２２日に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催されました。北海道からは北海道当別高等学校２年中川いづみと深瀬碧乃、私の３名が参加をしました。

講座は、クラブ員と顧問で別々のプログラムが用意されています。

顧問分科会のテーマは「学校家庭クラブ活動で広げるチーム力～可視化で理解を広めよう～」でした。１日目の分科会①では、県連活動報告の後、普通科、専門学科、総合学科に分かれて、運営課題と解決方法について話し合いをしました。引き続いて行われた分科会②では、各校の実践報告を行い、お互いに取り入れられそうな取り組みを話し合いました。その後、発表校への応援メッセージを書いて交換し合いました。自校の活動を評価していただき、励みになりました。午後からは、クラブ員と顧問が一緒に体験講座を受講しました。テーマは「『共生』自分を見つめ直し、仲間を大切に～自分があってこそ仲間を大切に思える～」です。丁寧に人の話を聞き、丁寧に人に伝え、信頼・尊敬できる関係性を築くことを学ぶ講座でした。ペアを組んで自己紹介をした後に質問や会話を通して相手を知り、お互いの良いところをカードに書いてプレゼントしました。自分では気づかなかった良い点を伝えてもらい、嬉しい気持ちになりました。続いての顧問講座は、「変化の激しい社会を生き抜く子どもたちのために～ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の充実～」と題した、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の市毛祐子氏による講義でした。教員がリーダーとして活躍するための心構え、高校生が身につけるべき資質・能力コア、家庭科でねらう力を明確にした授業改善のポイント、家庭科の充実・活性化のための工夫、等についてのお話がありました。これらの全てに関わる家庭クラブの重要性を、再認識する良い機会となりました。

２日目は、群馬県立渋川青翠高等学校の加藤裕子先生による実践活動報告で始まりました。「なにげないひとつの息吹を群馬の地から」と題して、児童養護施設での交流内容とその歴史について、報告していただきました。活動をアピールする方策や生徒に自信を与える指導に、感心させられました。続いて行われた分科会③では、各グループの交流成果をワークシートにまとめて、指導助言者からアドバイスをいただきました。このアドバイスによって、この２日間で学んだ内容をきれいに整理することができました。午後からの分科会④では、模造紙に成果をまとめて発表し合いました。先生方が、各地域の特徴を生かして熱心に活動している様子を知ることができました。

この２日間で、全国の先生方の熱い思いに触れ、活動の新しい視点を得ることができました。この度、参加の機会をいただきましたことに感謝いたします。

# 第６４回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会
# 北海道代表校として（ホームプロジェクトの部）

北海道札幌北高等学校教頭　　高　橋　一　矢

第６４回全国家庭クラブ研究発表大会は平成２８年８月４・５の両日福島県郡山文化センターを会場に開催され、「福島でむすんだ絆はなさずに　ありがとうを全国に」をスローガンに１３００人を超える参加者を得て、成功裡に終了することができました。県内の高校生達の多彩で質の高いおもてなしにより全国の家庭クラブ員が交流を深めることができたことが今大会の最大の成果であったと思います。地元高校生のリードによる生徒交流会での復興支援ソング「花が咲く」の全員合唱や、アトラクションで披露された高校生のフラダンス、地元特産品を豊富に取り入れた大会弁当の美味しさ等が特に印象に残ります。東日本大震災から５年が経過し、全国各地からの支援に対する感謝の思いを届けたい、そんな「繋がり」の気持ちが伝わってくる感動の大会でした。県内関係者の皆様や高校生諸君のご尽力に深く感謝申し上げます。

さて、福島大会ではホームプロジェクトの部に、本校３年生黒須玲未さん（他にサポートメンバー５名）が北海道ブロック代表として出場し、「家族三人四脚で一歩ずつ母を健幸（康）に！」と題して発表を行いました。発表内容の骨子は、管理職になった母が、栄養バランスの悪い食事と家事労働を最大限にこなす生活を続けたことにより、脂質異常症と低血圧と診断されたことを心配し、父と協力してデータをもとに「食品群別バランスタペストリー」や「万歩計ケース」の製作、病気の改善につながる料理の考案、家族の家事分担を容易にするための「家事分担習慣表」の使用等、様々な対応に努めた結果、母の健康は回復し、家族の健康意識も向上したというもの。多くのデータを活用した実態調査を通した科学的な視点からのアプローチには説得力あったと高い評価を受け、本校としては昨年に引き続き産業教育振興中央会賞を受賞することができました。サポートメンバーを含めたチーム北高の研究成果だと思います。また、審査員からは「何よりお母さんの健康を取り戻すために家族が協力して研究を進めており、優しい気持ちが伝わってきた」と本質をついた講評もいただき、部員一同感無量といったところでした。

ご存じの通り、現在、国は「女性の活躍」のひとつの目標として、2020 年までに議員や企業の管理職などに占める女性の割合を 30 %まで引き上げることを掲げています。女性管理職の増加に対応した支援の在り方については、今後検討が急がれる喫緊の課題になります。本校の発表がそうした今日的課題に切り込んだ、先駆的・実用的な実践例になるのであれば幸いに思います。

最後になりますが、複雑多様な社会の下、真に豊かな住みよい社会をつくるために、課題を解決すべく、未来を担う若者が協働して実践研究を進めることがいかに重要なことか今大会を通して再確認することができました。これは、ピンチヒッターとして急遽生徒引率の任にあたった家庭科教員以外の素人の率直な感想です。

# 第６４回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会
# 北海道代表出場校として（学校家庭クラブ活動の部）

北海道札幌丘珠高等学校教諭　　黒　田　さとみ

第６４回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会が、平成２８年８月４日（木）～５日（金）に福島県郡山市民文化センターで開催され、本校クラブ員４名が「防ごう！消費者トラブル～丘珠コミュニティが見守ります～」という題目で発表を行いました。

本校はこれまで、防災研究をとおして地域とのかかわり合いを深めてきましたが、その過程で「消費者トラブル」という新たな課題を発見することができました。さらに、これまでの活動や地域住民のアドバイスをもとに、地域で支え合う「共助」の力で消費者トラブルを防ごうという方向性を生徒自らが見いだすことができたのは、顧問として嬉しいことでした。

消費者トラブル防止を訴えるポスター、紙芝居、絵本、双六などを作成し、児童館や老人クラブで学習会を実施しました。生徒は試行錯誤しながらも、多くの方々に励まされ、アドバイスをいただきながら前向きに取り組んでいました。大人が思いつかないようなアイディアを次々と出し、私なら尻込みしそうな事柄にも積極的にチャレンジする姿勢には感服しました。この研究活動は４年間にわたりますが、生徒のチャレンジ精神や活動を楽しもうという姿勢は先輩から後輩へと受け継がれ、顧問としては心強く感じています。

生徒は全国大会出場各校の素晴らしい研究発表と大勢の観客に圧倒されてはいましたが、持ち前の素直さで精一杯、元気に発表をしていました。発表後は「消費者トラブルに巻き込まれないで！という想いが相手に伝わるように、心をこめて発表できたので良かった。」と感想を述べていました。この純粋な想いが研究活動の根底にあったのかと改めて感心しました。また、自分たちの研究成果を発表し、評価を受ける機会を得られたことに、とても満足していました。研究中も何度かそうした機会を設けましたが、その度に生徒が反省、改善をし、成長する姿が見られました。

大会中は、ホームプロジェクト部門代表校の札幌北高校のクラブ員と交流を深めることもできました。緊張でいっぱいの本校生徒にハート型の折紙に応援メッセージを書いて励ましてくれたお陰で、自信をもって発表することができたようです。両校とも産業教育振興中央会賞を受賞できたことも嬉しい出来事でした。閉会後、両校一緒の記念撮影での晴れ晴れとした笑顔が印象に残っています。試行錯誤して培った逞しさや粘り強さ、地域とのかかわりで育んだ自己有用感や周囲への感謝の気持ち、最後までやり遂げたという達成感や自信が、彼らの笑顔には溢れています。

最後に、本活動に際しては多くの方々からご指導、ご協力をいただきました。彼らの笑顔とともに、感謝申し上げます。

# 第６５回北海道高等学校家庭クラブ連盟
# 研究大会・総会を終えて

北海道札幌南高等学校教諭　　溝　淵　和　江

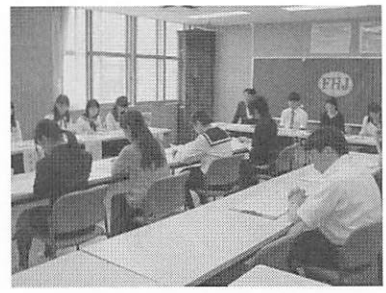
平成２８年９月１５日（木）～１６日（金）、北海道札幌南高等学校を会場に、参加校１０校、顧問・生徒合計１１３名参加のもと標記大会が開催されました。（詳細日程については下表の通り）今年度は、昨年度全国大会があったために短縮した日程を、例年通りの２日日程にして実施され、各支部を代表する学校家庭クラブ活動の部５校、ホームプロジェクトの部２校の研究発表が行われました。

| １日目 | ９月１５日（木） |
|---|---|
| 日　時 | 内　容 |
| 9:00～ 9:10 | 参加校受付 |
| 9:10～ 9:30 | 顧問打ち合わせ・設営 |
| 9:30～ 9:40 | 発表者打ち合わせ |
| 9:40～11:00 | リハーサル |
| 11:00～11:30 | 審査委員受付・審査委員会 |
| 11:30～12:30 | 顧問懇話会・昼食（斡旋有） |
| 12:30～13:00 | 代議員会 |
| 13:00～13:10 | 来賓受付・一般受付 |
| 13:10～13:40 | 開会式 |
| 13:45～15:55 | 学校家庭クラブ活動の部発表<br>①北海道丘珠高等学校家庭クラブ<br>②北海道倶知安高等学校家庭クラブ<br>③北海道旭川永嶺高等学校家庭クラブ<br>④北海道名寄産業高等学校家庭クラブ<br>⑤北海道名寄高等学校家庭クラブ |
| 16:00～16:40 | 生徒研修　折り紙体験・交流 |
| 15:55～16:40 | 審査委員会 |
| ２日目 | ９月１６日（金） |
| 8:45～ 8:55 | 受付 |
| 8:55～ 9:35 | ホームプロジェクトの部発表<br>①北海道江別高等学校２年河野美友<br>②北海道当別高等学校３年小山沙彩 |
| 9:40～ 9:55 | 全国指導者養成講座報告<br>北海道当別高等学校中川いずみ・深瀬碧乃 |
| 9:40～10:20 | 総会・審査委員会 |
| 10:30～11:30 | 表彰式・閉会式 |
| 11:30～ | 各担当部門片付け後、解散 |

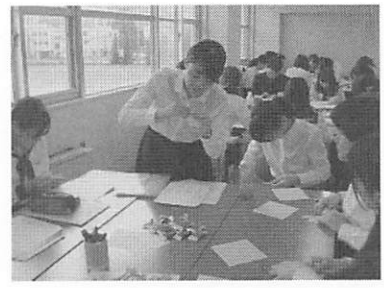
研究発表の結果は、学校家庭クラブの部で北海道倶知安高等学校「KUKKOU　INTERNATIONALIZATION　PROJECT」が、ホームプロジェクトの部で「もし家にいる時に災害がおきたら～自分の命を守るために～」北海道江別高等学校２年河野美友さんがそれぞれ最優秀賞を受賞し、平成２９年度、長崎県で開催される全国大会に出場することになりました。

来年度のこの大会の連絡調整業務担当校は、石狩支部北海道江別高等学校、会場は江別市民会館、９月中の開催を予定しています。

北海道札幌南高等学校家庭クラブ（ホームサイエンス部）は、今年度の全道大会・総会の連絡調整校業務担当校として大会運営に携わりました。初めての全道規模の大会の担当、そして自校開催ということで、限られた施設・設備、不慣れな進行等で、参加者の皆様にはご不便をおかけしたことが多々ありましたが、皆様のお力添えのお陰で無事に終了できました。今回の大会運営に携われたことで、生徒たちにとって普段の活動では得ることのできない貴重な体験となりました。改めまして皆様に感謝とお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



代議員会



生徒研修

# Ⅲ　平成２８年度北海道家庭科技術検定委員会
# 活動報告

# 家庭科技術検定の実施について

北海道高等学校家庭科技術検定委員長
北海道名寄産業高等学校長　増　田　雅　彦

日ごろから、専門委員の先生方のご尽力や各校のご理解とご協力に、心より感謝を申し上げます。

さて、今年度の全道の受検者数ですが、昨年度に比べると約250名減少しました。道内の生徒数の割合からすれば、受検者数は全国的にも決して多いとは言えませんが、資格試験や検定試験への取組が、求められる学力向上への一つの重要な推進力と確信しております。

平成２９年度まで本校で事務局を担当させていただきますが、一元化に向けた検定委員養成講座の在り方等、家庭科教育の充実・発展のため、努めてまいりますのでご協力のほどよろしくお願いします。

## 1　事業報告

### (1) 専門委員

| 役　　職 | 学校名 | 氏　　名 |
|---|---|---|
| 全国・北海道（和服） | 函館大妻 | 西本千春 |
| 全国・北海道（洋服） | 江　　別 | 高坂瑠美 |
| 全国・北海道（食物） | 名寄産業 | 荒木恵理 |
| 北　海　道（被服） | 美唄尚栄 | 駒谷綾子 |
| 北　海　道（食物） | 当　　別 | 佐藤郁子 |
| 北　海　道（食物） | 三　　笠 | 斎田雄司 |

### (2) 諸会議・講座等

①常任委員研究協議会　H28.4.21
②第１回専門委員研究協議会　H28.4.21
③全国高等学校家庭科技術検定専門委員会　H28.5.12~13
④第２回専門委員研究協議会　H28.8.8
⑤評価研究協議会・検定委員養成講座　H28.8.9

今年度は、江別高校を会場に評価研究協議会、検定員養成講座を開催し、全道各地からの参加者がお互いに実り多い研鑽を積みました。

## 2　受検者数の推移

| | 種目 | H28 | H27 | H26 | H25 | H24 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 4級 | 被服 | 158 | 250 | 315 | 392 | 238 |
| | 食物 | 1,132 | 1,157 | 1,106 | 1,156 | 1,207 |
| 3級 | 被服 | 126 | 128 | 154 | 211 | 159 |
| | 食物 | 673 | 749 | 786 | 728 | 661 |
| 2級 | 和服 | 58 | 58 | 76 | 71 | 77 |
| | 洋服 | 57 | 54 | 50 | 49 | 90 |
| | 食物 | 249 | 296 | 305 | 294 | 293 |
| 1級 | 和服 | 56 | 50 | 51 | 53 | 43 |
| | 洋服 | 44 | 42 | 45 | 51 | 41 |
| | 食物 | 205 | 224 | 173 | 168 | 141 |
| 合　計 | | 2,758 | 3,008 | 3,061 | 3,173 | 2,950 |

## 3　検定実施校数の推移

| 年　度 | H28 | H27 | H26 | H25 | H24 |
|---|---|---|---|---|---|
| 実施校数 | ４５ | ４２ | ４４ | ４１ | ４２ |

平成２９年度から、家庭科技術検定（被服製作、食物調理、保育）の一元化が本道においても試行的にスタートします。

今後とも、本技術検定の益々の充実と発展に向け、皆様方のご理解とご協力を重ねてお願い申し上げます。

# 平成２８年度全国高等学校家庭科技術検定
# 全国専門委員会（食物）に参加して

北海道名寄産業高等学校教諭　　荒　木　恵　理

平成２８年度全国高等学校家庭科技術検定全国専門委員会が５月１２日（木）～１３日（金）東京都千代田区にあるアルカディア市ヶ谷で行われ、北海道からは被服（和服）専門委員の函館大妻高校、西本千春教諭、被服（洋服）専門委員の江別高校、高坂瑠美教諭と食物専門委員の私の３名で参加し、研究協議・情報交換を行いました。

１　開会式・全体会

開会式では、来賓の文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　市毛祐子様より研修を通して評価の精度や指導の工夫について深めてほしいとのお話がありました。

２　分科会

全体会に引き続き、被服製作と食物調理の分科会が行われ、私は食物調理分科会に参加しました。

食物調理分科会では、今年度の変更点として、１級実技の評価方法が一皿ごとの評価に変更になっていることの説明がありました。一皿ごとの評価では付け合わせも含めて評価し、程度によっても減点数が変わってくることが確認されました。その他の変更点として、１級でインスタントコーヒーとベーキングパウダーが使用可能になり、辛子明太子が使用不可となったこと、１級指定調理の「黄身酢」について、自由材料がレモン汁のみになったことや、提出する分量が変更されていることについても確認されました。

２日目には、２級の献立記入について演習を交えて行い、記入上の注意点や指導のポイント、生徒が間違えやすい点などを丁寧に解説していただきました。

指導助言では、近年生徒の技術力が非常に低下している現状についての話しがありました。当たり前にできていたことが当たり前ではなくなっているので、どこにつまずきがあるのか見極めて、コツを伝えて行くことが大切であるとのお話をいただきました。

３　全体会・閉会式

全体会では、保育検定との一元化についての説明や、諸手続の変更点についての確認があり、今年度より申込期間が全級統一となったことや、申込み・報告についても開始期限があるので、期間を厳守して欲しいとの注意がありました。

市毛祐子教科調査官より、技術検定は生徒の技術力向上だけでなく、意欲や自信の向上にも繋がる活動であるので、継続して指導していって欲しいということや、家庭科の指導充実に向けて、ＩＣＴ活用や評価方法などの工夫により、生徒の思考力・判断力・表現力を高める言語活動の充実を図っていってほしいというお話をいただきました。

４　おわりに

全国各地の熱心な先生方と交流することにより、多くのことに気づき、確認ができた大変貴重な機会となりました。全道の先生方と共有できる機会が作れるよう、事務局の運営にも努めていきたいと考えています。

# 平成２８年度全国高等学校保育専門委員会
# 第９回全国高等学校保育研究大会に参加して

北海道当別高等学校教諭　今 多 靖 子

**全国高等学校保育専門委員会**

平成２８年度全国高等学校家庭科保育技術検定全国専門委員会が６月３日（金）、アルカディア市ヶ谷で開催されました。北海道からは専門委員である函館大妻高校の工藤真知子教諭、当別高校の澤谷郁恵教諭２名と、本部委員で運営に携わる私の計３名が参加しました。

平成２７年度の保育技術検定の受検状況について報告がありました。総数は116,108人で、平成２６年度に比べ約3,500人増加しました。音楽リズム、造形表現、言語表現、家庭看護のうち、最も受検者数が多いのは造形表現で39,174人、それぞれの種目の伸び率に大差はありませんでした。北海道は、４７都道府県のうち４１番目の受検者数で、実施校は平成２７年度が７校、平成２８年度が８校でした。

家庭科技術検定の一元化について説明がありました。現在、保育技術検定は本部事務局が申込み受付、検定事務処理全般、研修にあたる全国専門委員会の開催、すべてを担当しています。家庭科技術検定（被服製作、食物調理）では、都道府県に代表理事校があり、仕事が分かれています。被服製作（和服・洋服）、食物調理、保育技術検定のすべてに代表理事校が対応することになるのが一元化です。平成２７年度から試行県による試行が始まり、平成２９～３１年度の間に全都道府県が一元化か二元化を選択して試行し、平成３２年度以降は全都道府県で検定代表理事校一元化による家庭科技術検定の実施となります。

保育技術検定においても評価研究のための「講師派遣制度」があり、このような動きから、平成３２年度までにはすべての都道府県でこの制度を活用した研修を実施することになり、北海道は平成２９年度に実施する方向で代表理事校である名寄産業高校に調整いただいています。

午後は平成２８年度指導要項と実施上の注意について報告があり、続いて種目別の指導と評価のあり方について、音楽リズムと家庭看護、言語表現と造形表現に分かれて協議が行われました。一元化に伴い、１、２級は審査員派遣による審査が行われるため、１、２級を中心にした内容構成でした。私は言語表現を担当しており、生徒による絵本の読み聞かせと素話の実演動画を用いて評価研究を行いました。他の種目においても、音楽リズムでは本部委員による実演、造形表現は作品の提示、家庭看護は生徒による実演動画を用いて評価研究を行いました。

**第９回全国高等学校保育研究大会**

平成２８年１１月１０日（木）、１１日（金）、福岡県大牟田市で開催された第９回全国高等学校保育研究大会に参加しました。「保育教育の充実と発展に向けて～命の絆を紡ぐ保育～」が大会の研究テーマでした。

１０日は「小さき命をバトン」と題し、一般社団法人スタディライフ熊本の特別顧問である田尻由貴子氏による基調講演があり、１１日は誠修高校保育科による音楽劇「黄金のトランペット」が近隣の保育園・幼稚園を招待して行われました。

私は４年前から全国保育の本部委員を務めています。先に述べたように平成２９年度は保育技術検定の研修会を実施する予定です。被服製作や食物調理と同様に保育技術検定も、生徒が取り組むことで自信を持つようになり、技術が定着して学習意欲が図られる内容です。北海道の多くの先生方が取り入れたいと思うよう尽力していきたいと思います。

# Ⅳ　家庭科教育に関する報告

# 平成２８年度第５４回北海道高等学校教育研究大会 教科別集会家庭部会を終えて

北海道札幌新川高等学校教諭　　柿　澤　小百合

平成29年1月12日(木)、札幌エルプラザ4階大研修室において道内各地から７３名の参加を得て、研究主題「生涯を見通して生活を創造する力を育む家庭科教育」のもとに開催した。

１　総会

平成27年度事業報告・決算報告・会計監査報告、平成28年度事業計画・予算案が承認された。平成29年度研究主題については、役員会・運営委員会に一任された。

２　講演

演題：「家庭科教育の実践・福島からの発信」

講師：ゆめ・ざぶん賞福島実行委員会

委員長　　荒　由利子　様

約４０年間にわたり、福島県で家庭科教員として活躍されてきた実践から高齢者施設を訪問し生きることの大切さを学ぶ「命の授業」、マナーや共食の大切さも含めて学ぶ「調理実習の実践」、また「学校家庭クラブ」での実践を通して地域と密着しながら課題を発見し、より良い生活を作り出す研究を行ってきた。また、数多くの全国大会出場経験を通して、生徒は創造力を育成し、人間的な成長も遂げることができたと実感している。

さらに震災後の経験から、災害時では自ら考え行動する能力が大切である。まさにその能力を育成するのが家庭科教育ではないか。

３　研究協議

(1)研究発表

主題：「保育分野の授業実践

～学習を生活につなげる授業をめざして～」

発表：北海道苫小牧工業高等学校教諭

北川　かな絵

親の気持ちや立場を想像し、将来親となるイメージを持たせるために鶏卵を子供に見立てた実践や、市や町と連携した授業を実践している。また、子育て経験をした男性教員の講義を設定、母子手帳と合わせて父子手帳の活用、性教育講座や赤ちゃんふれあい体験も実施し、生徒の問いをきっかけにした保育分野での実践を発表していただいた。

(2)グループ協議・情報交換：「家庭科の学習内容と家庭生活をつなげる実践」

８グループに分かれて地域と連携している実践や防災教育など分野を問わず各校での実践内容を交流し、活発にグループ協議・情報交換が行われた。

(3)助言：北海道教育庁後志教育局教育支援課

高校教育指導班主査　佐　紺　摂　子　様

研究発表の内容では、地域と連携した授業を展開したことにより、生徒は多くの人と触れ合うことで他者と関わる力を高め、生徒の変容を促した点について評していただき、今後の家庭科教育の充実に向け、学習内容の可視化、学校家庭クラブ活動、研究会などの組織力の一層の強化について講評いただいた。

４　研究紀要

滝川西高校家庭科の授業改善の取組

執筆：北海道滝川西高等学校教諭

福　間　あゆみ　教諭

滝川西高校では平成２５年度から「授業改善の具体的な方策」に取り組んでおり、家庭科でも取り組む方策を３点あげ、アクティブ・ラーニングを取り入れた保育分野と消費生活分野での実践について執筆していただいた。

# 北海道高等学校長協会家庭部会
# 意見・体験発表大会を開催して

事務局　北海道江別高等学校教諭　上　野　博　美

(1)大会を運営して

今年度４回目を迎えた家庭部会意見体験発表大会は、『全道の高等学校で家庭・福祉を学んでいる生徒が、日頃の学習で学んだことの成果について、意見や体験を発表するとともに、生徒相互の交流をとおして、「生きる力」を育み、家庭・福祉教育の充実を図る』目的で実施しています。

8月23日に北海道江別高等学校を会場に、道内９校９名の参加で行われました。普通教科「家庭」から発展した「家庭選択科目」「家庭クラブ」などの体験や学び、専門学科ならではの体験など、この社会変化の中で、豊かな心をもって生き生きと活動している姿を見ることができました。今後も、主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる家庭・福祉教育の「生きる力」を感じる大会にしたいと思います。

今回は普通科の参加が少なく、学校行事との調整が難しかった学校もありました。開催時期の検討を含め、参加しやすい大会運営をしていかなければならないと思っています。ご意見・ご感想などをいただき、さらに改善していきたいと考えています。普通科の生徒にとって人前で発表する機会は少ないので、この大会を有効活用していただきたくお願い申し上げます。

来年度もこの趣旨を踏まえ、より多くの生徒が参加できますようご理解・ご協力のほど、よろしくお願いします。参加いただいた各高校の生徒の皆さん、ご指導いただいた先生方に、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

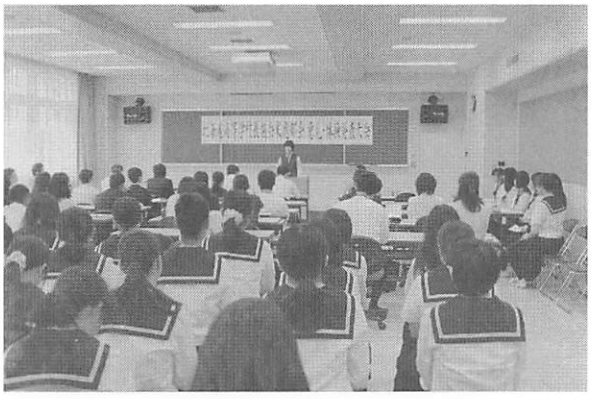
(2)大会参加者

①置戸高校　一ノ戸　真由　『心の輪』
②名寄産業高校　松本　怜也
　『私の未来設計図～パティシエへの道～』
③当別高校　横田　ゆう　『あの日の嘘は』
④剣淵高校　川原　亜弓
　『介護の現状と両者の視点』
⑤江別高校　三角　双葉　『私の世界に彩りを』
⑥真狩高校　三野　雪絵　『近年の食生活』
⑦千歳北陽高校　鈴木　颯太
　『福祉の街づくりを目指して』
⑧江陵高校　平井　沙希　『福祉とは何か』
⑨三笠高校　佐々木　響一
　『青春の味～高校生食堂まごころきっちん～』

(3)大会結果

最優秀賞　千歳北陽高校　鈴木　颯太
優秀賞　当別高校　横田　ゆう
優秀賞　剣淵高校　川原　亜弓
産振推薦　当別高校　横田　ゆう
　　置戸高校　一ノ戸　真由

※産振推薦：家庭部会代表として平成２８年度産業教育意見・体験発表大会に参加しました。



# 第４回北海道高等学校長協会家庭部会
# 意見・体験発表大会に参加して

指導者　北海道千歳北陽高等学校教諭　　古御堂　敦　子
発表者　北海道千歳北陽高等学校２年　　鈴　木　颯　太

（1）生徒を指導して

北海道千歳北陽高等学校教諭　古御堂　敦　子

発表大会に参加するために、生徒と、「今学習していること」と「自分自身・生活・社会」との関係性について対話を重ねることになりました。生徒の豊かな発想に教師である私が多くを学び解釈を深めていくことになったと感じています。

（2）生徒原稿「福祉の街づくりを目指して」

北海道千歳北陽高等学校２年　鈴　木　颯　太

この夏は、リオオリンピックが大変に盛り上がりました。４年後の東京オリンピックも楽しみです。オリンピックには、世界中から多くの人が日本を訪れます。開催に向けて世代や性別・障がいの有無などにかかわらず、あらゆる人々に、日本の多様な文化に触れてもらおうと、特に障がいをもつ方々に対する環境整備が進められています。

私の住む千歳市には、北海道の空の玄関口である新千歳空港があり、毎日、日本中・世界中からたくさんの観光客が訪れます。では、千歳市を訪れる全ての人は、安全で快適に過ごせているのでしょうか。そんな疑問を抱いた私は、新千歳空港を訪問し、空港内を歩いてみました。すると、空港の総合案内所 10 カ所に、「耳マーク」が設置されていることを知りました。このマークは、「聴覚に障害のある方に、必要な支援をします」という意思表示をしているそうです。私は手話を学んでいますので、この手話で何か貢献できることはないかと考えました。しかし、私が、手話に興味があったり、少し手話ができたりするということは、周りの人にはわからないことです。そこで、「手話を学んでいます」ということを知らせるものがあればいいなと考えました。それは、アクセサリーやキーホルダーの形にして身に付けられるようにしたい思い、手話を学ぶ仲間と一緒に実際に作ってみました。表面には手話、裏面には文字で「手話ができます」と書きました。これを目立つところに付けておけば、どこかで誰かの役に立てると考えています。

手話の学習をしてから５か月になるのですが、あるとき、ふと思ったことがあります。「ここにいる人が全員、耳が聞こえないとしたら。そして、その全員が手話で会話をしていたとしたら。そこに、耳は聞こえるけれど手話のわからない自分がいるとしたら、一体、“障がい者”と呼ばれる人は誰なのだろう」と。私たちは、自分自身の中にある「当たり前」を見直してみる必要があるかもしれません。例えば、子どもやお年寄りがゆっくり道路を横断していたとしたら、若者のスピードが当たり前なのではなく、「ゆっくり」が当たり前なのだと考えられないでしょうか。あるスーパーのレジでは、会計の遅くなってしまうお年寄りのために、ゆとりレーンというレジを作ったそうです。しかし、「ゆっくり」が当たり前だとすれば、すべてをゆとりレーンにすればよいのではないでしょうか。もしかすると、障がいはわたしたちの気持ちや環境によって、障がいでなくなるのではないか、そんなことを考え始めています。

オリンピックを招致するときに話題になった「おもてなし」。誰かのために心をつくすことが「当たり前」であるということが、本当のおもてなしかもしれません。私たち一人ひとりが、誰に対しても心をつくすことができれば、すべての人が今よりも不自由がなく、社会は今よりもあたたかくなると思います。

# 北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して
# （家政科）

指導者　北海道当別高等学校教諭　村　田　ひろ美
発表者　北海道当別高等学校３年　横　田　ゆ　う

（１）生徒を指導して

北海道当別高等学校教諭　村田　ひろ美

横田さんが自分の人生を振り返って、成長していく過程を見ることができたのは、教員として嬉しい事でした。

（２）生徒原稿「あの日の嘘は」

北海道当別高等学校３年　横田　ゆう

二年前、高校入試の面接で志望動機を尋ねられた私は、「私には、年の離れた弟が三人います。弟たちと遊んだりするうちに、保育士になりたいと思うようになりました。それで、保育を学ぶことのできる当別高校家政科の受験を決めました。」と答えました。私は嘘をつきました。本当は成績が悪すぎて札幌市内の公立高校では合格できるところがなく、自分でいろいろ調べているうちに、当別高校なら合格の可能性があることを知りました。家庭科の実技は好きだったので、受験するならまあ家政科かなと思った、というのが本当の理由です。

このように、特に夢も持たずに入学した私は、二年生になってコースを選ぶときも、「食物調理」か「保育」か、ずいぶん迷いました。最終的に「保育コース」に決めたのは、担任の先生から「肌が弱くて食器洗剤で手が荒れるのなら、保育のほうがいいのかもしれないね。」と言われたからです。

そんな私が変わった理由が二つあります。一つ目は母と弟達の存在です。私が高校に入学したとき、長男は五歳、次男は三歳、三男は一歳でした。長男と下の弟達は違う保育園に通っていました。母はみんな同じ所に入れたかったのですが、定員がいっぱいで上手くいきませんでした。このため母は毎朝ＪＲ「あいの里教育大駅」から三人を連れて乗り、「拓北駅」で次男と三男を預け、またＪＲに乗り「新川駅」で長男を預け、またＪＲに乗り「札幌駅」で降りて会社に向かうという生活をずっと続けていました。その大変そうな様子を見て、少しでも力になりたいと思うようになりました。

二つ目は保育実習です。実習前の私は、保育士は子どもと遊んで歌っておしゃべりをしているだけでお給料がもらえる楽な仕事だと思っていました。でも、実際に保育実習に行ってみると、子どもは何が危険なのかを理解できてないので平気で道路に飛び出す、好奇心旺盛なので何にでも触るなど、ひやひやする場面をたくさん見て、認識が変わりました。保育士という仕事は、子どもの命を預かるとても大変な仕事でした。

実習はいろいろ大変でしたが、楽しかったです。今日は整列ができるようになった、今日は歌が歌えるようになったと、子どもたちの成長が本当に楽しみでした。保育実習が終わったとき、私は「子どもの成長を間近で見ることができる保育士ほど、やりがいのある仕事はない！」と思うようになっていました。

今まで適当な生活を送ってきた私が保育士になるためには、知識や技術ばかりではなく、礼儀や責任感など、まだまだ手の届いていない部分があります。でも、私は決めました。私は保育士になります。子どもたちに好かれ、親から信頼される保育士になります。私が入試のときについた嘘は、嘘でなくなりました。

今の私の精一杯の姿を見てください。

# 北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して

## （福祉科）

指導者　北海道置戸高等学校　教諭　　大　内　亜瑞沙
発表者　北海道置戸高等学校　２年　　一ノ戸　真　由

（１）生徒を指導して

北海道置戸高等学校教諭　大　内　亜瑞沙

生徒が学校活動や介護実習から学んだ経験を振り返り人前で発表する経験ができ、自らの取り組みに自信が持てたのではないかと思います。各校の発表から産業教育の様々な取り組みを知る貴重な経験になりました。産業教育に携わる一員としてこの経験を生かして指導したいです。

（２）生徒原稿『心の輪』

北海道置戸高等学校２年　一ノ戸　真　由

「慣れたって言わないと職員さんに迷惑かかるっしょや。」利用者様が小さな声でおっしゃった言葉です。今年の二月、グループホームでの五日間のコミュニケーション実習でＡ様という利用者様に出会いました。Ａ様は前日、新しく入所された女性で、軽度の認知症がありましたが、意思疎通は可能な方でした。Ａ様の手を握ると「あったかい手をしてるね。」と笑顔でおっしゃいました。しかしＡ様の手はとても冷たく、そこから「帰りたい」という気持ちや「施設に慣れるだろうか」という不安が伝わってきました。「可能な限りＡ様の傍に寄り添い、不安を少しでも減らしたい」と思い私はＡ様に「施設の生活には慣れましたか？」と聞きました。するとＡ様は私の耳元に近づき、小さな声でおっしゃいました。「慣れたって言わないと職員さんに迷惑かかるっしょや。」Ａ様は困った表情で俯いてしまいました。Ａ様が小さな声でおっしゃったのは、職員さんに悪いという思いがあったのでしょう。そして、周りに遠慮し気を遣っている様子も伺えました。孤独や不安に配慮できず、私はかけてしまった言葉への後悔が募りました。利用者様にとって大切な家族や住み慣れた家を離れ施設に入所するということは、どれだけの苦痛や不安が伴うのでしょうか。私自身、現在地元を離れ寮生活を送っています。慣れない環境に戸惑い、不安に涙することもあります。想像力を膨らませて考えられたら、あのような言葉はかけませんでした。「利用者様の気持ちになる」介護や福祉を学ぶ中で基本中の基本です。利用者様の笑顔の裏には言えない不安や苦しみがあり、時として言葉に現れないその感情を介護者は読み取ったり、配慮する事がとても大切であると痛感させられました。Ａ様に不安な気持ちを少しでも忘れて楽しんでもらいたいと考え、翌日一緒にレクリエーションを実施することにしました。Ａ様も見たことのない笑顔でとても楽しそうに折り紙を折ってくれました。再び触ったＡ様の手はとても温かく、先日の冷たいＡ様の手ではありませんでした。

信頼関係を築くために、利用者様と介護者との「心の輪」が大切になると私は思います。自分の思いが伝わり、相手の思いを考え、理解し、受容することで互いの気持ちを分かりあえたら、「心の輪」は繋がっていくのだと思います。これから、私は介護技術の実習が待っています。介護技術を勉強していく中で利用者様の心身の状況に合わせた介護の重要性を学んできました。身体だけでなく心に寄り添う介護とは何かを考えた時、思い出されるのはＡ様が教えてくださった「心の輪」を大切にすることです。表情から読めなくても、言葉に表されなくても、利用者様の心を察することのできる専門職が介護福祉士だと思います。

対人援助職において忘れてはいけない大切な事を教えて下さったＡ様に感謝しこれから出会う全ての人との「心の輪」を大切にしていきたいです。

# 平成２８年度初任段階教員研修

# １年次研修（高等学校）「一般研修」に参加して

北海道利尻高等学校教諭　成　田　佳　織

１　期日　平成２８年１２月２６日（月）

２　参加人数　１５２名（家庭科１１名）

３　会場　北海道第二水産ビル

４　研究内容

（１）　説明・協議・演習

「生徒指導力・進路指導力」「学級経営力」

講師：北海道立教育研究所研究・相談部

上野　昌生　研究研修主事

内容：①生徒指導の在り方

②キャリア教育

③学年・ホームルーム経営のポイント

④学習・生活規律

⑤ホームルーム担任業務の在り方

（２）　説明・協議

「チーム貢献力」「地域との連携・対応力」

講師：北海道立教育研究所総務部兼企画・研修部

花松　均　主査

内容：①組織の一員として求められる資質・能力

②教職員の服務

③保護者との連携

④地域連携

⑤学校評価

（３）　説明・協議「教科等指導力①」

「家庭科教育の現状と課題」

講師：後志教育局　高等学校教育指導班

佐紺　摂子　主査

内容：①家庭科教育の現状と課題

②国や本道の施策等

③課題の交流

④自己の課題の明確化

（４）　説明・協議「教科等指導力②」

「『ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動』の実態」

講師：北海道江別高等学校

髙坂　瑠美　教諭

内容：①「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」の取組

（５）　説明・演習「教科等指導力③」

「授業改善」

講師：後志教育局　高等学校教育指導班

佐紺　摂子　主査

内容：①学校評価（観点別学習状況の評価）の意義

②目標と指導と評価の一体化を図る指導の在り方

③学習評価を踏まえた授業改善

④「指導と評価の計画」の作成（演習）

（６）　研修のまとめ

内容：①研修の振り返り

５　おわりに

全体会、教科別部会においてたくさんの先生方にご指導いただきましたことを感謝いたします。

特に、教科別部会で「目標と指導と評価の一体化」について日々の悩みを初任者同士で共有し、協議できたことは自分自身の課題を明確にし、具体的な改善策を得るまたとない機会となりました。

また、ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の取組を拝見し、生活をよりよくするために生徒が主体的に学び、改善策を考える力を育てる家庭科教育の魅力を改めて実感することができました。

今回の研修で学んだことを日々の指導で実践していきます。今後もご指導のほどよろしくお願いいたします。

# 平成２８年度１０年経験者研修
# 教科別部会【Ⅰ・Ⅱ期】に参加して

北海道夕張高等学校　　中　尾　　綾

１　期　日　Ⅰ期：平成２８年７月２８、２９日
　　Ⅱ期：平成２９年１月４日

２　目　的
　教科指導等の教育課題について、個々の能力、適性に応じた研修を実施し、指導力向上を図る。

３　場　所　北海道立教育研究所

４　参加者　４名

５　運営者
後志教育局高等学校教育指導班主査　佐紺　摂子　氏

６　研修の学び

【教科別部会（Ⅰ期）】

学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ指導のポイントや教科指導の充実を図る指導と評価の工夫について説明があった。なかでも、「評価は何のためにするのか」を確認した上で、評価規準、評価の方法、時期の工夫について助言を受け、今後の指導の参考となった。

「教育課程の編成・実施と改善」に関する説明では、これからの教育課程は、現代社会の激しい変化に柔軟に対応する“社会に開かれた教育課程”が期待されていることを教わった。特に、より良い社会を創るという目標を社会と共有すること、生徒自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを明確にした上で、地域の人的・物的資源を活用し、社会と連携しながら実現させることが重要と感じた。

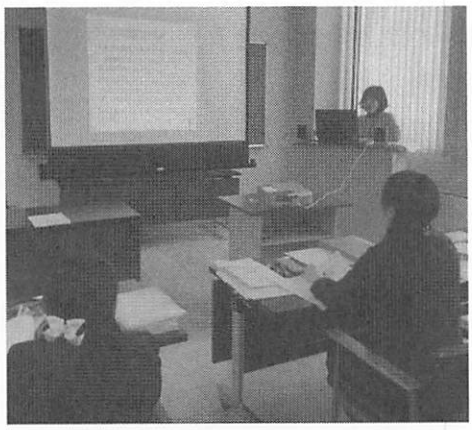
【課業期間中の実践】

Ⅰ期の研修を終え、保育分野において、地域と連携した、「赤ちゃん抱っこ体験」を計画した。ＩＣＴの効果的な活用や生徒の主体的・協働的な学び、事前学習と事前準備に重きを置いた結果、当日の「赤ちゃん抱っこ体験」は大変有意義なものとなった。

【教科別部会（Ⅱ期）】

課業期間中に実施した授業実践について各自がプレゼンテーションを行った。その後の協議では、ＩＣＴの活用、ワークシートの有効活用、グループ学習の成果について共通課題が見つかった。

また、学習指導案や資料をじっくり作成・見直すことで、「指導と評価の一体化」を明確にし、授業改善の方策を整理することができるようになった。



７　おわりに

グローバル化、少子高齢社会の到来、選挙年齢引き下げ等、社会は急速に変化している。今後は、この変化を視野に、新しい時代に求められる資質・能力を確実に育成する授業改善のＰＤＣＡサイクルを確立すること、地域社会との連携、アクティブ・ラーニングの手法を活用した授業改善、実験・実習により生徒に実社会で活用できる実践力や応用力をつけさせることがより重要であることなど、本研修での学びは大きい。改めて、教職十年を振り返る良い機会となった。

# 平成２８年度
# 産業・情報技術等指導者養成研修を受講して

北海道江別高等学校教諭　上　野　博　美

〈期日〉平成２８年７月２６日（火）
～７月２９日（金）

〈研修場所および研修内容〉

７月２６日全国高等学校長協会家庭部会事務局

・講義「家庭科における授業改善の視点」
　文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官　市毛 祐子 氏

新学習指導要領改訂の方向性から家庭科の目指す役割を再認識した。

・講義「暮らしと地域に関わる家庭科教育の実践」　元西脇高等学校長　門脇 千里 氏

地域との関わりからＨＰやＳＰへと参考になる実践事例だった。

・講義「被服における技術の定着を図る指導の工夫」　岐阜城北高等学校教諭　今井 明世 氏

特に製作で考えさせる時間を設けることが有効だと参考になった。

・講義「消費者市民を育む消費者教育の実践について」消費教育支援センター
　総括主任研究員　柿野 成美 氏

積極的な消費者市民教育、ｴｼｶﾙｺﾝｼｭｰﾏｰの視点を生徒に伝えねばと感じた。

７月２７日　文化服装学院

・講義「ファッション業界の動向について」
　文化服装学院ｷｬﾘｱ支援室　池田 衛 氏

・講義「ﾌｧｯｼｮﾝ産業人材育成高校連携ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ～感性向上に向けてのカリキュラム開発」
　文化服装学院生涯学習部　井手口 和子 氏

・講義「産業革命×教育革命-世界が注目！復活する”ﾒｲﾄﾞ・ｲﾝ・ｼﾞｬﾊﾟﾝ”と今、教師と生徒に求められる情報受発信力」
久米繊維工業株式会社取締役会長
　久米 信行 氏

ﾌｧｯｼｮﾝ業界の現況を踏まえ、「生活産業基礎」の参考となる知見を得た。

・講義・実習「個性を引き出し、発想力、思考力、表現力を育てる造形教育」
　文化服装学院生涯学習部　丸山 晴美 氏

紙による立体から展開をし、型紙を作成するなど参考になった。

７月２８日　東京誠心調理師専門学校

・講義「現代の食生活の課題やトレンド、フードビジネス等について」
東京誠心調理師専門学校講師　竹森 美佐子 氏

食器から献立、栄養バランスを考えるなど、視点が広がった。

・実習「おいしさの科学と調理」
　東京誠心調理師専門学校講師　鈴木 歩 氏

・講義・演習「盛り付けの基本知識」「盛り付けの実践」「施設見学」
　東京誠心調理師専門学校講師 齋藤 利昭 氏

「だし」の魅力の他、かつらむき等の調理技術伝授が大変役立った。

７月２９日全国高等学校長協会家庭部会事務局

・講義「幼児を取り巻く環境の現状と保育の課題」・演習「発達に応じたかかわりを考える」
　聖徳大学大学院教授　篠原 孝子 氏

教育課程が幼稚園から始まり、発達段階に応じての課題を再認識した。

・講義「暮らしを楽しむ住まいの工夫」
　日本女子大学・文化学園大学非常勤講師
　西田 恭子 氏

家の設えから見る住まいが暮らしに大きな影響をもつと感じた。

〈まとめ〉

各分野における最新の情報を得て、日々研修に努めなければと実感した。このような場を与えてくださった関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

# V　福祉教育等に関する報告

# 平成２８年度第１６回福祉に関する教科・科目設置校研究協議会を終えて

主管校　北海道置戸高等学校長　花　田　祐　治

《開 催 期 日》

平成２８年１１月１８日（金）

《開 催 場 所》

北海道置戸高等学校

《開　会　式》

北海道高等学校長協会家庭部会長小松芳幸（北海道江別高等学校長）の主催者挨拶及び北海道置戸高等学校長花田祐治（主管校）の挨拶、置戸町教育委員会平野　毅教育長の挨拶で開会とした。

《基 調 報 告》

全国福祉高等学校長会北海道地区理事北海道置戸高等学校長花田祐治より理事会及び総会の報告。

○介護技術コンテストにおける審査員の構成・審査の基準について見直しの提案

○社会福祉・介護福祉検定について

今年度の大きな変更点

①２級の実施-１級は30年度から実施②受験要件の変更-４級・３級・２級の受験要件撤廃。何級からでもスタート可能に（複数受験が可能）③申し込み-口座振込の後メールで申し込み、振込手数料を引かずに振込んだ場合は返金されない④４級の難易度-難易度に変更は無いが、出題は教科書の本文からに限定（昨年注釈から出題し混乱）

○【文部科学省より】矢幅清司視学官

①カリキュラムマネジメント

②学習指導要領の改訂（平成30年度から実施）

ア　医療的ケアへの対応

イ　マネジメント力・倫理

ウ　ICT・介護ロボットなど福祉機器への対応

エ　科目名の見直し

オ　教員要件・実習施設要件・実施時数等

カ　新しい時代に対応した福祉の提供ビジョン

③教員要件について

ア　資格代替に係る講習会はもうやっていない

イ　資格代替に係る実習は継続してやっている

ウ　資格代替に係る講習会の実施については、その必要性を訴えられる材料を用意しておく

○全国福祉高等学校長会

組織改革と、改変後の活動のあり方

○平成29年度青森大会。主管校：東奥学園高等学校

○第１回北海道地区高校生介護技術コンテスト

《講　　演》

長内美紀様（介護福祉士、アクティビティ・ディレクター）より『アクティビティ・ケアは介護の世界を変える！～ワクワク、ドキドキは心の原動力～』と題し、勤務先を中心とした活動内容や、アクティビティ・ケアの目的などの講演をいただいた。

《校 長 会 議》

○今後の主な当番校等のローテーション一覧の確認

○次年度以降の介護技術コンテストの運営担当等について実行委員会方式の決定

○教員研修の実施について経過説明

《研 究 協 議 Ⅰ》

○情報交換（検定・コンテストなど）各学校の取組

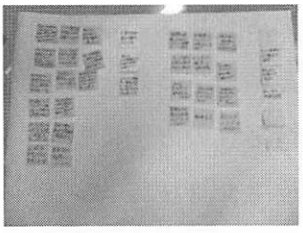
《公 開 授 業》

１年生「介護総合演習」場面を設定したコミュニケーションについて（ロールプレイ）

授業者：居内映莉子・佐藤由香里・大内亜瑞沙

《研 究 協 議 Ⅱ》

○公開授業についての合評会



グループワークにより公開授業に対する感想と、各校の日頃の悩みに対する解決策の共有を行った。

また、それぞれグループの代表による発表後、小松部会長より助言をいただいた。

《校長会議報告》

○校長会議で決定した内容の報告と全国校長会及び次期学習指導要領について情報提供

校長:７名、教員:９校・１８名が参加。

研究協議会参加者　記念撮影

# 第１回北海道地区高校生介護技術コンテストの開催について

北海道置戸高等学校　教諭　水　谷　　愛

（１）コンテストを開催するにあたって

第１回北海道地区高校生介護技術コンテストを８月２３日（火）に北翔大学（江別市）において開催しました。

高校生介護技術コンテストは平成２３年度に行われた第２１回全国産業教育フェア鹿児島大会において第１回全国高校生介護技術コンテストが開催されました。北海道地区は平成２６年度に介護技術コンテスト北海道地区予備審査を始め、第２４回宮城大会から参加しました。

北海道地区予備審査は介護方法をレポートし、その内容を審査する方法を採用していましたが、利用者様の日常生活を想像する力、根拠に基づいた介護方法を創造する力を高める必要があると考え、技術審査の方法に転換し、第１回北海道地区高校生介護技術コンテスを開催する運びとなりました。今回の開催にあたり、多くの後援、協賛を賜りましたこと心からお礼申し上げます。

（２）実施方法

| | |
|---|---|
| 競技内容 | 課題に対する介護技術を競う |
| 競技時間 | 介護技術７分、アピール２分 |
| 出場資格 | 北海道地区の高等学校で福祉を学ぶ生徒（同一校の選手２名、控え選手１名） |

（３）課題について

居室のベッドで端座位になっている北海さんに、お茶会の時間が近づいてきていることを伝え、上着を着ていただき、車いすでテーブルまで移動する介助をしてください。そして、お茶と菓子の準備をお願いしてください。

（４）審査項目について

【介護】
コミュニケーション、プライバシーへの配慮、自己決定の尊重、自立支援、意欲を引き出す工夫、安全・安楽への配慮、個別因子や環境因子に応じた介護、介護者同士の連携、時間
【アピール】
エビデンスに基づく介護、創意工夫のある介護

（５）結果について

| 賞 | 学校名 | 生徒氏名 |
|---|---|---|
| 最優秀賞 | 北海道置戸高等学校 | 吉田　桃花、山田　亜希 |
| 優秀賞 | 北海道剣淵高等学校Ａ | 石和　　隼、杉本　　茜、佐藤　未唯 |
| 奨励賞 | 江陵高等学校 | 鈴木　沙弥、藤原　実優、木村瑠璃香 |
| ４位 | 函館大妻高等学校 | 太田穂奈美、藤谷　麗奈、関崎友里亜 |
| ５位 | 北海道剣淵高等学校Ｂ | 井川　　愁、加藤　美穂、平原　伽耶 |

# 第５回全国高校生介護技術コンテスト石川大会に参加して

北海道置戸高等学校　教諭　相　馬　良　美
３年　山　田　亜　希
３年　吉　田　桃　花

平成２８年１１月６日（日）、石川県のいしかわ総合スポーツセンターにて開催された「第５回全国高校生介護技術コンテスト」に北海道代表として参加してきました。今年度は、８月に北海道では初めて実技を伴う地区大会が行われ、そこで本校生徒が最優秀賞を受賞し、全国大会出場の機会を得ての参加となりました。

全国大会には、北は北海道、南は沖縄まで各地区の代表全１２チームが参加し、日頃の学習の成果を発揮しました。

介護技術コンテストは事前課題と当日課題があり、事前に利用者様の心身の状況や居室の環境などの基本的な情報が伝えられ、本番当日にその日実践する介護の課題が伝えられます。

今年の課題は、右片麻痺のある利用者様が居室の入り口で車椅子に座っており、その方をベッドまで移動し、カーディガンを脱がせてベッドに横になってもらい、側臥位の安楽な姿勢にして休んでもらう…といった事例の課題でした。

本校は事前の情報を元に、利用者様の生活や思いを想像し、想定されるあらゆるパターンの介護方法を練習し、準備をして臨みました。本番では多くの人が見守り緊張する中、一つひとつ丁寧な声かけと介助を行い、利用者様の思いを大切にし、自立支援を意識した介助を行いました。結果は、優秀賞をいただき、初出場にして大きな成果を残すことができました。

○介護技術コンテストに参加して

今回コンテストに参加させていただくにあたり、事前課題を元に考えられる課題を予想して時間の許す限り練習を積み重ねてきました。本番では制限時間内で丁寧かつ素早く介助を行うことの難しさを改めて感じるとともに、他の学校の技術を見て、コミュニケーション能力の高さや同じ課題でも全然視点が違うことなど多くのことを学ぶことができました。今後はこの学びを活かし、より良い技術を実践できる看護師になりたいです。　（山　田　亜　季）

私は置戸高校に来て始めて「福祉」というものを学びました。高校３年間で１１週間の介護実習を経験しましたが、実習では一人ひとり、その日その時で変化する利用者様の様子やその状況に応じた対応をしていくことが必要で、「福祉」というものの学びには終わりがないことを学びました。介護技術コンテストでも、これまでの学びを活かし、事例の利用者様像をしっかりイメージし、その方にとって最善の介護方法を考え実践しました。このような機会を与えていただき挑戦することができて本当によかったです。　（吉　田　桃　花）

北海道では数少ない福祉科高校ですが、全国には同じ志を持って日々、努力をしている高校生がたくさんいることを改めて知り、生徒達にとっても大きな励みになったことと思います。

今回の経験を活かし、今後も生徒達が多くの課題や困難にぶつかりながらも、誇りを持って福祉や介護について、学び続けられる環境をつくっていけるよう努めていきたいと思います。

# Ⅵ　各地区（ブロック）家庭科研究会の一年間の活動状況等

## 石狩管内

◆実施日　平成28年5月10日(参加者34名)

(1)総会

(2)実践発表・研究協議

・「災害における自助・共助・公助について考える」

(発表者) 札幌山の手高校　西田　恵理教諭

◆実施日　平成28年10月11日(参加者30名)

実技研修・研究協議

「素材を知る　だしを知る」

(講師)健やかサロン「日日是好日」主宰

(社) だしソムリエ協会認定講師　小葉松弘恵

◆実施日　平成29年1月24日(参加者30名)

講演・研究協議

「ユニバーサルデザインの考え方」

縫製職人のUDへの挑戦

～『体感と無意識をとらえる』～

(講師)株式会社ワールドワーク代表取締役

川道　昌樹

## 渡島・檜山地区

◆実施日時 平成28年10月18日(参加者12名)

(1)総会

・会則確認

・平成27年度決算報告

・平成28年度予算案

・昨年度運営委員からの報告

・平成29年度体制

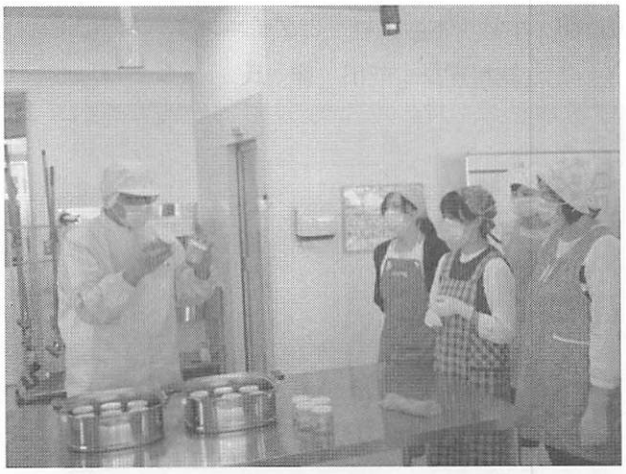
(2)研修講座

製造加工方法「サケフレーク瓶詰め」

(3)研究協議

・生徒の興味・関心の強い実習・実験のアイディア、手応えのあった教材について

・主体的な学び（アクティブラーニング）を取り入れた指導例



## 後志支部

◆実施日時　平成28年11月17日　(参加者5名)

(1)総会

・役員確認

・平成27年度事業報告

・平成28年度事業(案)

・平成28年度当番校の確認

(2)研究協議

・平成29年度以降当番校について

・全道家庭科研究協議会運営委員の確認

・全道家庭科研究協議会司会・提言者の割当

・各校の取り組み

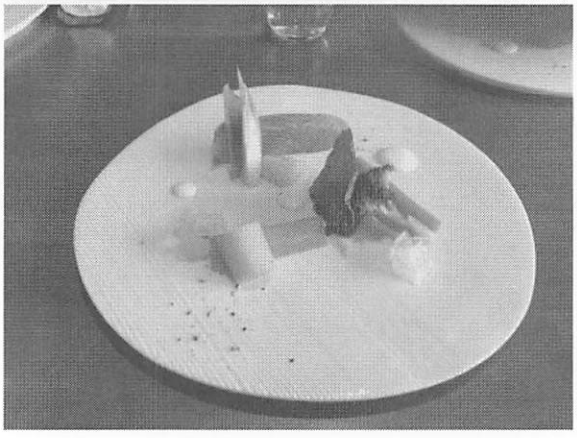
・実習について

(3)講義・実技研修

「テーブルマナー講習会」

(講師)　ホテル木ニセコ　杏ダイニング

総料理長　前田　伸一氏



## 空知管内

◆実施日時　平成28年10月5日（参加者11名）

(1)総会

・平成２７年度　事業報告・会計決算報告

・平成２８年度　事業計画案・予算案

・平成２８年度　会員・規約の確認

・事務局ローテーションの確認

・平成２９年度　研究会の内容について

(1)研究協議

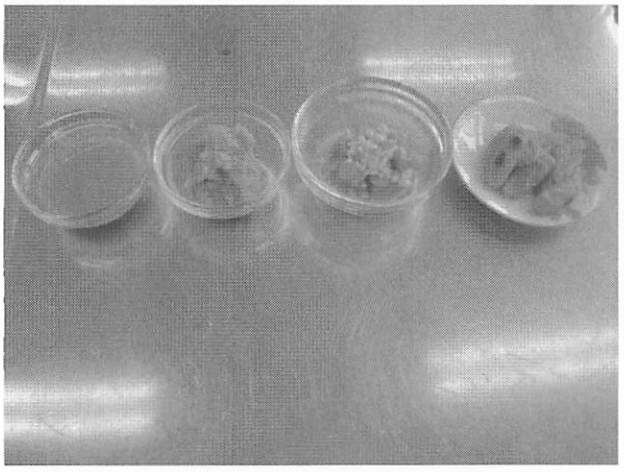
・各校の取り組みや授業についての情報交換

(3)研修

「ライフステージの栄養学実習」

講師　光塩学園女子短期大学

食物栄養科 准教授　布川　育子　氏



## 上川・名寄地区

◆実施日時　平成 28 年 5 月 12 日（参加者 20 名）

(1) 総会

・平成 27 年度研修報告

・平成 27 年度会計決算報告・監査報告

・上川管内高等学校教育研究会教務部会家庭分科会について

（研究協議会の運営、会則修正、役割分担等）

・役員改選

・平成 28 年度研究協議会計画(案)・予算(案)

(2) 研修①

研究協議「平成 31 年度北海道高等学校家庭科教育研究協議会での提言等に向けて」

研修②「介護とアロマテラピー」

(講師) ナード　アロマテラピー

インストラクター　中村　知子氏

◆実施日時　平成 28 年 10 月 12 日(参加者 22 名)

(1) 研修①

「ミラノ万博で大好評！道産食材の潜在力」

(講師) ヌキタロフィスド　代表　貫田　桂一氏

研修②

「共に生きる・五感で感じるデザイン」

(講師) 株式会社ワールドワーク

代表取締役　川道　昌樹氏

(2) 研究協議

①「全道教科研究会提言発表について」

②「提言発表の共同研究方法について」

◆実施日時　平成 28 年 3 月 16 日

(1)　役員研究協議会

・平成 28 年度研修報告・反省

・平成 28 年度会計決算報告・監査報告

・平成 29 年度研修計画について

・各校課題、取り組みについて

## 留萌管内

◆実施日平成 28 年 10 月 19 日(水)（参加者 5 名）

(1)総会

・平成２７年度事業報告

・平成２７年度会計報告

・平成２７年度監査報告

・平成２８年度事業計画（案）

・平成２８年度予算（案）

・規約、当番校確認

(2)研究授業

・授業内容･･･調理実習

「地産地消の食材を用いた調理実習」

天塩町スローフードの会会長

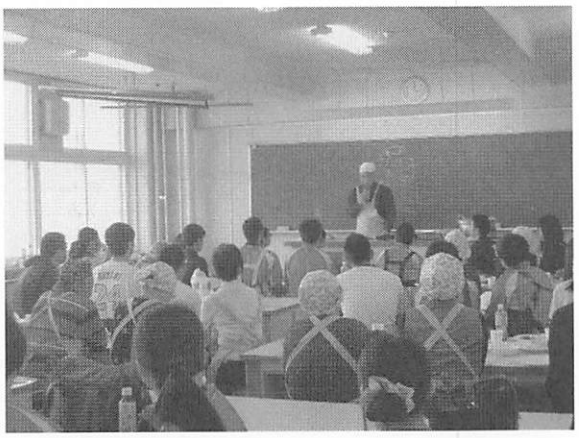
国奥　強　氏　他 13 名

(3)研究協議Ⅰ

・研究授業について

(4)研究協議Ⅱ

・各校の取組と課題



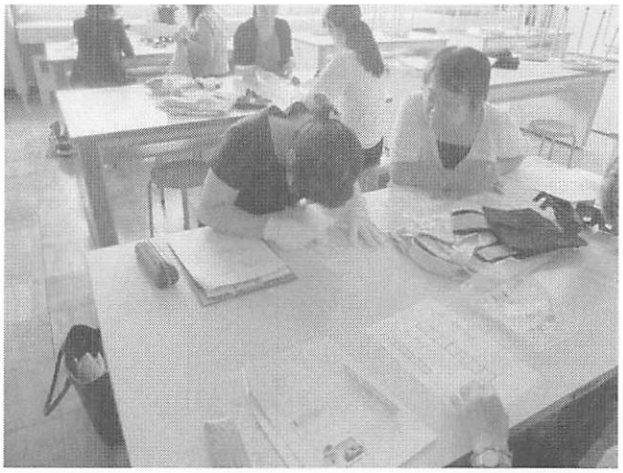
## 宗谷管内

◆実施日時　平成２８年１１月１８日（金）
（参加者　８名）

(1)研究授業
「食生活のあり方を考える」
授業者
北海道稚内高等学校　　嘉見　晴香　教諭
(2)研究協議
「地域と連携した体験的な授業の実践について」
※各校における実践と課題について協議し、今後の授業に役立てる。
(3)講話
「今日、求められる家庭科教育について」
講師
北海道教育庁後志教育局教育支援課高等学校教育指導班　　佐紺　摂子　主査

## オホーツク管内

◆実施日時　平成 28 年 9 月 7 日（参加者 18 名）
(1) 講演
「共に生きる社会を考える」
講師　株式会社ワールドワーク代表取締役
兼 G-スタイル合同会社代表取締役
川道　昌樹 氏



(2)総会
・平成 27 年度事業報告及び決算報告
・平成 27 年度監査報告
・平成 28 年度事業及び予算審議
・事務局校、当番校の確認
・その他
(3)研究協議（情報交換）
「住居分野について」
※各校の取り組みや出張講座の利用など、情報交換を中心とし協議を行い、授業に役立てる。

## 釧根地区

◆実施日　平成28年10月18日（参加者12名）

（1）総会

・平成２７年度事業報告

・平成２８年度事業計画（案）について

・平成２９年度事務局、当番校について等

（2）体験実習

「羅臼の郷土料理～魚介類の調理～」

講　　師：　羅臼漁業協同組合女性部

部長　石田　ひろみ　様

（講師補助　他７名）

実習内容：・鮭といくらの親子丼

・つみれ汁

・昆布巻きかまぼこ

・鮭ザンギ

・ドスイカのマリネ

（3）情報交換会及び報告会

## 十勝管内

＜全体会＞

◆実施日　平成28年6月7日（参加者22名）

（1）総会

・平成27年度事業報告及び決算報告

・平成27年度会計監査報告

・会則の改正及び研究会の回数について

・平成28年度事業案及び予算案　　等

（2）研究協議会

「つながり（小中高、地域、家庭、社会）を重視した家庭科教育のあり方」

◆実施日　平成28年10月11日（参加者19名）

（1）講演「認知症を理解する」

（講師）新得やすらぎ荘施設長　高畑 訓子 氏

（2）見学　あすなろファーミング

（3）研究協議

「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

＜ブロック研究協議会＞

Aブロック

◆実施日　平成28年9月27日（参加者4名）

（1）研究協議

「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

（2）見学　明治十勝チーズ館

Bブロック

◆実施日　平成28年7月28日（参加者6名）

（1）研究協議

「アクティブラーニングの実践と評価の工夫」

Cブロック

◆実施日　平成28年7月28日（参加者8名）

（1）研究協議

「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

◆実施日　平成28年12月9日（参加者8名）

（1）研究協議

「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

◆実施日　平成29年3月21日

（1）研究協議

「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

## 胆振管内

◆実施日　平成 28 年 10 月 11 日（参加者 13 名）

(1)総会

・平成 27 年度事業報告

・平成 27 年度決算報告

・今年度以降の家庭部会の運営について(案)

・平成 28 年度事業計画(案)

・平成 28 年度予算(案)

・平成 28 年度役員

(2)研修会

「だしソムリエと学ぶ

　だし素材の『うまみ』と検証」

講師　だしソムリエ協会認定講師

鰹節問屋(有)永見　代表取締役　桃井　一元　様

(3)各校交流会

・調理実習の指導と実施計画について　等

## 日高支部

◆平成２８年１１月２９日（参加者６名）

(1)実技実習：食品科学

「乳飲料の加工～アントシアニンと酸化」

講師：北海道静内農業高等学校

　　教頭　伊興部　明　先生

本校で生産・販売されていた「乳飲料さくらちゃん」の加工実習をもとに、当時、商品開発の担当をされていた先生に講師を依頼し、紫さつまいもの酸添加に際して起きる色の変化と、還元によって見ることのできる発色について実技実習しました。実習では本格的な材料が紹介され、実際の製菓行程で使用されている香料などの食品添加物について、講義と実物の紹介も行われました。実習の最後には、乳飲料を商品として販売することができる容器に充填する体験をしました。

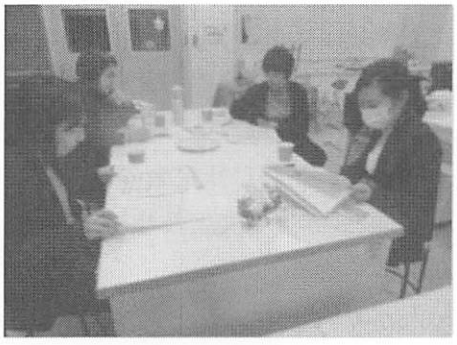
(2)研究協議

「ｱｸﾃｨﾌﾞﾗｰﾆﾝｸﾞにおける評価・課題について」

○実践校の資料紹介

（平成２８年度北海道高等学校家庭科教育研究協議会提言資料より）

内容：研究会開催にあたり事前に各校へ研究協議で取扱いたい内容についてアンケートを実施しました。「ｱｸﾃｨﾌﾞﾗｰﾆﾝｸﾞの評価について」を取り上げたい旨の回答が複数ありましたので、今年度は事前に管理職と相談し、発表校の了解をもらって、８月に行われた研究会の提言資料を紹介させていただきました。主に、生徒が課題解決学習した際の発表時間の様々な評価方法について、資料をもとに話し合いをしました。



# Ⅶ 特 別 寄 稿

# 「たくましく生きる力を育む家庭科教育の発展を期待して」

北海道江別高等学校長　　小　松　芳　幸

ご縁があって、三年前に江別高校に着任しました。着任前から、江別高校は校長協会家庭部会の事務局校であることは理解していましたが、当初は文字通り戸惑いの連続でした。運悪く？輪番による家庭クラブ北海道連盟の成人会長へのダブル当選？でもあり、次から次と迫って来る初体験の行事や諸会議に暗中模索状態の対応で、生来怠け者の私もさすがに緊張の連続だったことを思い出します。

しかし、怠け者故にこの緊張感と適度に次々と到来する仕事の処理に追われることが、自分にとっては大切なことかもしれないと次第に思えるようになりました。生徒には「人は目的、目標があって初めて行動を起こすもの」と説き自堕落な生活を戒め、目標を持った生活を常に望んでいた私ですが、いやでもやらざるを得ない状況に置いていただいたことが、私にとっては幸いなことだったと感謝しております。

家庭部会長として、この三年間の中で最大の行事は、やはり昨年度札幌市で開催された、全国高等学校家庭クラブ研究発表大会北海道大会の開催でした。生徒が主体の大会ですから、発表するのも表舞台で活躍するのも全道の家庭クラブ員である生徒です。しかし、その裏で生徒に時間をかけ、並々ならぬ情熱を注いで指導する全道の家庭科の先生方を目の当たりにし、さらに大会期間中に生徒が成長する様をこの目でしっかりと見ることができたことが、大きな成果であり喜びでもありました。大会事務局として主管していただいた当別高校のみなさんには改めて心より感謝を申し上げます。

また、夏の全道家庭科教育研究協議会や冬の高教研家庭部会等家庭科に関連する各種の研究・研修における家庭科の先生方の熱心な取り組みも私にとっては新鮮なものでした。研修テーマの設定から運営の細部に至るまで、運営委員会を組織して自分たちの手で中身のある研修にして行こうとする意欲が感じられ、頼もしく感じられると同時に熱心な研修ぶりには驚きさえも感じたものでした。

さらに、各種の研究会を通して全道の家庭科の先生方の中には、大変優秀な人材が多く存在することも新たな発見でした。昨今、指導主事や教頭昇任試験受験者が激減しており、家庭科も例外ではありませんが、是非力のある先生方には自信を持って昇任試験への挑戦も考えてほしいと願っております。

最後に家庭科で身に付く力には、①生活の知恵と技術、生きる知恵　②思考力・判断力・表現力　③コミュニケーション力　④課題解決力・段取り力　などが挙げられますが、これらを一言で表すと「たくましく生きる力」ということになります。生徒が生涯に亘る長い人生を豊かでたくましく生きるために、力を付けさせるという重要な使命を家庭科は担っていることに責任と誇りを持ち、且つ忘れないでいただきたいと思います。

私はこの三月末をもって定年退職となりますが、この三年間にわたる関係各位のご厚情とご支援ご協力に改めて感謝を申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

# 「多くの先生方との出会いに恵まれた３８年間」

北海道札幌南高等学校教諭　　溝　淵　和　江

昭和５４年、念願の教職に就くことができ最初の赴任先は季節定時制農業科でした。季節定時制と聞いても皆様あまりご存じないかもしれませんが、農繁期は週２日登校し授業を受け、農閑期は毎日登校するという形態の学校です。生徒が登校していない時の農繁期は生徒の家々を巡回指導し、ホームプロジェクトの指導等をしていました。農業科なので、生徒と一緒に農作業をし、作物を育て、収穫をするという一連の農業の流れも体験しましたし、家庭科教師という立場でホームプロジェクトや意見発表、技術検定等の大会出場のための指導なども体験しました。就職したての頃の私とあまり年が違わないのに、一生懸命に働きながら学ぶ姿勢をもった生徒たちに頭が下がる思いでした。思い返せば、この時の経験がその後の教職生活の礎になったと感じています。何事も体験してみることがいかに大事かということです。

その後普通科高校に転勤し、家庭科の各種研究会、中でも高等学校家庭科教育研究協議会、学校家庭クラブ連盟活動をとおして、たくさんの生徒そして先生方との出会いがありました。１校にほぼ１人しか配属されていない家庭科教員にとって、他校の先生方との接点が生まれるのが各種研究会であり、家庭クラブ活動であると思います。これらは私の教職生活での財産です。これらの活動をしていなかったら今の私はなかったと思っています。日々の様々な仕事で忙殺されて大変なのはわかりますが、長い目で見たときに、困った事を相談できたり、愚痴を言い合ったり、同じ思いを共有できる仲間が全道各地に存在することのありがたさほど心強いものはありません。皆様もできる限り外に出てたくさんの方々と接するように心がけてほしいと思います。

私は、手芸が好きで、幼い頃より祖母や母から編み物を習ったりしていました。その延長線上に家庭科教師という選択肢がありました。当時の私は、小さいながらも自分で工夫して自分の使う手袋やエプロンを作ったり、ハンカチに刺繍をしたりと、今思えば少しだけですが、創造的なことに喜びを見いだせる生活をしていました。肩こりを自覚するようになってしまった近頃は創造的な生活からはほど遠くなってしまいました。残念です。

母からは、「女性も仕事はやめないで続けなさい」といわれて育ったので、女性が仕事をするのは当たり前と思っていました。実際に経験してみるとなかなかハードな現実もありました。しかし、ここでも家族の暖かいサポートに恵まれて仕事を継続できました。

３８年間の教職生活を振り返ると、失敗したことや迷惑をかけた場面も思い起こされ、反省しなければならないこともたくさんあります。しかし、それとともに、様々な方々のご協力と力強いご支援に恵まれたことで今の私があるということをひしひしと感じています。今までの素晴らしい出会いに感謝し、皆様のご多幸とご健康を祈念しております。本当にありがとうございました。

# 編　集　後　記

おかげさまで何とか・・・・「有難うございました！」

北海道高等学校長協会家庭部会誌「2017　こですHOKKAIDO」が・・・完成しました。
まずもって、お忙しい中にもかかわらず、原稿を執筆していただきました多くの皆様方に、心より感謝申し上げます。有難うございました。

今年度（平成２８年度）は、北海道洞爺高等学校から業務を引き継ぎ、北海道三笠高等学校が担当となりました。奇しくも、平成２８年３月末で洞爺高校が閉校し、同じように道立高校としては閉校した後、市立の食物調理科単科校として再生した三笠高校が業務を担うことになるとは・・・・・。不思議な巡り合わせの業務引継と思ったところでした。

この一年は、本校家庭科　小野　晃子　先生が中心となり、学校全体で担当した形となりましたが、未知の業務への不安もあり、悪戦苦闘の日々であったと振り返っています。しかし、数年にわたり、一手にこの業務を引き受けていた　秋田　貴子　先生（現：札幌工業高校）の引き継ぎ資料等のおかげで、うまく継承することができました。いま、何とか編集作業を乗り越えることができ、本当に有り難く、感謝の思いでいっぱいです。

そして、こうした業務を通して、本校の先生たちは、北海道高等学校長協会家庭部会の仕事を俯瞰することができました。毎年発行されるこの「こですHOKKAIDO」には、家庭科関係の事業が網羅されているからです。長い年月、各時代を背景として高校家庭科が果たしてきた記録が「こですHOKKAIDO」に詰め込まれているとともに、家庭科に携わってくださった校長先生方、教職員の皆様方の想いまでが染みこんでいる部会誌であることを痛切に感じつつ編集作業を進めたところでした。

改めて、関係各位の皆様方のご協力に感謝し、「有難うございました！」の言葉をお伝えするとともに、「2017　こですHOKKAIDO」が、これまでと同様に、多くの高等学校で活用していただきましたら幸いでございます。

平成２９年３月吉日

「こですHOKKAIDO」担当校
北海道三笠高等学校長　佐々木　淑　子

北海道高等学校長協会家庭部会　こですHOKKAIDO

発行日　平成２９年３月３１日
発　行　北海道高等学校長協会家庭部会事務局
（北海道江別高等学校）
編　集　北海道三笠高等学校
印刷所　社会福祉法人　共有会　札幌福祉印刷
札幌市西区西町北１５丁目５番７号
TEL　（011）667-7771
FAX　（011）667-9750

こ で す　ＨＯＫＫＡＩＤＯ　とは

Collected papers･････････････ 集　録
Domestic Science････････ 家庭科
Studies･････････････････ 研　究

家庭部会が研修して、それをまとめあげる
こーして仕上げることを、でかすと解釈し
北海道は、「こーですヨ」という意味です